

鎌倉の文化財

その価値と魅力 ～比較研究から見えたもの～



網引地藏やぐら（浄光明寺境内）

鎌倉の文化財

その価値と魅力 ～比較研究から見たもの～

目次

はじめに	なぜ比較研究を行うのか	3
第1回	鎌倉から始まった禅宗寺院	6
第2回	禅宗様建築の成立と発展	13
第3回	大仏様の来た道	23
第4回	やぐらの広がり	31
第5回	鎌倉の神社について ～鶴岡八幡宮を中心として～	38
報告会	鎌倉の文化財、その価値と魅力 ～比較研究の成果とこれからの課題～	46
付録	現地調査先一覧	55

この報告書は、平成27～28年度に実施された比較研究の連続講座及び報告会の記録をまとめたものです。

なお、本書作成に当たり、講座及び報告会の内容に一部加筆修正しています。

は
じめに

なぜ比較研究を 行うのか

神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市（以下、「4 県市」と言う。）世界遺産登録推進委員会では、「武家の古都・鎌倉」というコンセプトで世界文化遺産登録を目指していたが、平成 25 年度、イコモス（国際記念物遺跡会議）により「不記載」と勧告された。

そこで、4 県市世界遺産登録推進委員会では、不

記載勧告となった原因を徹底検証し、再推薦・登録に向けて戦略の練り直しを図ることにした。

そのための第一段階として、平成 26 年度～ 28 年度の 3 年間をかけ、新たなコンセプト構築に向けた土台作りとして、比較研究を中心とした基礎的な調査研究を実施することとした。

なぜ「比較研究」が必要か？

「武家の古都・鎌倉」が不記載の勧告となった原因を徹底検証した結果、下記の 3 点が大きなポイントであることが判明した。



不記載の最大の原因の一つに「**比較研究の不足**」があった。世界遺産の再推薦・登録のための新たなコンセプトの再構築には、比較研究によって「鎌倉」の普遍的価値を見出すことが不可欠である。

比較研究とは何か？

目的

寺院の伽藍・建築・庭園など鎌倉の文化遺産の個々の要素と、国内外の類似資産を詳細に比較し、相違点を明らかにしていくことで、鎌倉の文化・資産の価値を浮き彫りにすることを目的としている。

方法

- (1) 文献調査や有識者からの意見聴取等＝デスクワーク
文献による考察や、比較対象・比較の観点について検討する。
- (2) 国内外の類似資産の現地調査＝フィールドワーク
実際に現地に赴き、基礎データを収集する。

何を「比較」するのか？

イコモス勧告で、鎌倉が評価された要素がある。その評価された部分をより明確にし、強みとして打ち出せば有利になることは間違いない。

とりわけ社寺については、「今日、鎌倉が十分な物証を示しているのは、寺院に関連した精神的文化的側面のみであり」と高い評価を得ている。切通及びやぐらも比較的評価された。これを受けて、右記の項目に絞って比較研究を行うことにした。

主な比較研究項目

- ① 寺院境内（立地・造成、境内・伽藍配置、庭園、景観等）
- ② 寺院建築（禅宗様建築）
- ③ 神社境内・建築（立地、建築様式）
- ④ 大仏（規模・素材・造形、鑄造方法・技術等）
- ⑤ やぐら（石窟寺院等との比較：規模・形状、内部構造・装飾、立地）

比較研究(現地調査)の進捗状況

有識者に同行いただき、下記の通り現地調査を行った。

海外現地調査

平成26年度

- (1) 中国第1回(平成27年2月1～9日)＝「天地の中央」登封、龍門石窟、白馬寺、雲崗石窟

平成27年度

- (1) 中国第2回(平成27年7月19～25日)＝南宋五山他の寺院、西湖
- (2) 中国第3回(平成27年8月26日～9月3日)＝大足

石刻、樂山大仏、麻浩崖墓、敦煌莫高窟

- (3) 韓国第1回(平成28年1月12日～1月16日)＝石窟庵、仏国寺他の寺院

平成28年度

- (1) 韓国第2回(平成28年6月24日～28日)＝伝統的山岳仏教寺院群、桧巖寺・桧巖寺跡
- (2) 中国第4回(平成28年8月13日～20日)＝五台山、唐・遼・宋・金代等の古建築

国内現地調査

平成26年度

- (1) 京都第1回(26年10月23～25日)＝龍安寺、妙心寺、知恩院、天龍寺
- (2) 京都第2回(27年1月26～28日)＝大徳寺、相国寺、南禅寺、建仁寺、東福寺、泉涌寺
- (3) 東京・甲信・中部第1回(26年11月3日)＝正福寺
- (4) 東京・甲信・中部第2回(26年11月12～14日)＝恵林寺、清白寺、東光寺、光前寺、永保寺
- (5) 中国地方(27年3月10～12日)＝安国寺、不動院、常栄寺、功山寺

平成27年度

- (1) 宮城(27年7月30～31日)＝やぐら
- (2) 北陸(27年10月21～22日)＝やぐら
- (3) 日光(27年10月29日)＝東照宮、二荒山神社、大猷院

- (4) 千葉第1回(27年11月10日)＝やぐら
- (5) 千葉第2回(27年11月16日)＝やぐら
- (6) 千葉第3回(27年12月22日)＝やぐら
- (7) 近畿・東海(27年11月11～13日)＝石清水八幡宮、北野天満宮、波豆八幡神社、久能山東照宮
- (8) 九州(27年11月19～20日)＝やぐら
- (9) 四国・九州(27年11月24～27日)＝伊佐爾波神社、柞原八幡宮、宇佐神宮、宮崎宮、太宰府天満宮

平成28年度

- (1) 福井・富山(28年8月22日～23日)＝永平寺、瑞龍寺

主な現地調査先（海外）



雲崗石窟第20窟 如来坐像 中国山西省大同市



南宋五山第2位 靈隠寺 中国浙江省杭州市



第
1
回

鎌倉から始まった 禅宗寺院

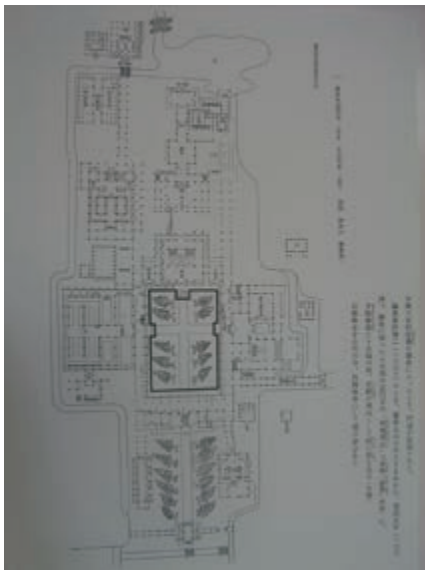
平成27年11月15日実施講座
於 建長寺

比較研究の連続講座第 1 回は建長寺で開催し、建長寺をはじめとする鎌倉の禅宗寺院が、なぜ日本における禅宗の歴史の始まりと言えるのか、現地調査結果を基に報告を行いました。

建長寺境内の特徴からみた比較の観点

谷戸造成 (やとぞうせい)

鎌倉の主な寺院のほとんどは、谷戸の内部に立地し、山裾を垂直に切り下げ、中央部を埋め立てて敷地を確保する谷戸造成によって造られている。その証拠として、山際にはいたるところに切岸(きりぎし)と呼ばれる人工の崖が残されている。



『建長寺伽藍指図』元弘元年(1331年)
出典:鎌倉市教育委員会『史跡建長寺境内・名勝及史跡建長寺庭園 保存管理計画策定報告書』

直線的な伽藍 (がらん) 配置

建長寺の主要伽藍つまり建築物は、山門～仏殿～法堂(はつどう)が中軸線上に直線的に配置されている。

この伽藍配置は創建当初から維持されているが、開山の蘭溪道隆(らんけいどうりゅう)が南宋五山(なんそうござん)の寺院における伽藍配置を導入したもので、創建当初の伽藍配置を示す『建長寺伽藍指図』(けんちょうじがらんさしず)(鎌倉時代末期の伽藍を描いたもの)にはその様子が描かれている。

建長寺や円覚寺に見られる主要伽藍を中軸線上に配置する建て方は、日本における初期禅宗寺院伽藍の典型であり、建長寺から京都五山や大徳寺(だいたくじ)、妙心寺(みょうしんじ)といった大禅宗寺院の伽藍スタイルとして広がった。



主要伽藍が直線上に配置されている

山稜部と一体となった境内景観

建長寺の伽藍は狭い谷を造成して確保された境内に直線的に配置されているが、それらは谷の三方を取り囲む山稜部と一体となり、静寂な宗教空間と美的景観を形成している。こうした境内景観は、南宋五山や他の中国寺院、さらに日本の禅宗寺院には類例のない鎌倉固有の景観となっている。

さらに、中国の禅宗寺院では山門前に池を配置するのに対し、方丈(ほうじょう)奥に配置された庭園は、建長寺から始まった日本独自のものが、円覚寺、瑞泉寺へと引き継がれ、京都で盛行する禅宗庭園の先駆けとなったものである。

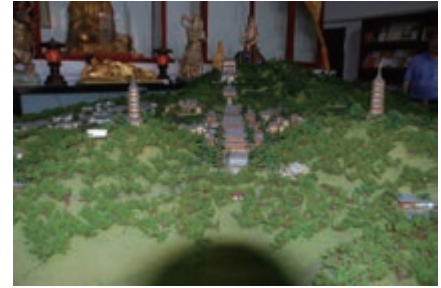
現地調査を行った海外の寺院

有識者意見聴取結果を踏まえ、「鎌倉」との関連が強いと考えられる中国の禅宗寺院を中心に調査を行った。

中国の南宋五山 (なんそうござん)

径山寺 (きんざんじ・Jìngshānsì) 第一位 (浙江省杭州)

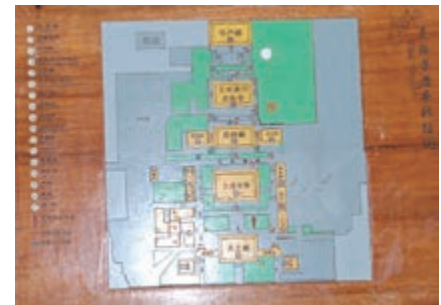
- ・中唐の769年に開かれ、南宋初期の1137年に臨濟宗寺院として最盛期を迎える。
- ・建長寺開山の蘭溪道隆が学んだ寺院である。
- ・標高800m程の位置にある山岳寺院。20世紀の動乱による破壊により、現在の伽藍は1990年代以降に再建されたものである。



径山寺最盛期の全体模型。山中に伽藍を直線上に配置している

靈隱寺 (れいいんじ・Língyǐnsì) 第二位 (浙江省杭州)

- ・五胡十六国(東晋)時代の326年に造られ、北宋初期の960年頃に禅宗化した。1007年に靈隱寺となった。
- ・山の中腹にあり、伽藍配置は直線上に並び、付属の建築が方形に配置されている。
- ・大雄宝殿(だいゆうほうでん)と天王殿(てんのうでん)は清朝末期のものだが、それ以外の建築は1990年代以降に再建された。



靈隱寺の境内配置図。主要伽藍が直線上に並んでいる

天童寺 (てんどうじ・Tiāntóngsi) 第三位 (浙江省寧波)

- ・西晋の300年頃に草庵から始まり、晩唐900年頃に禅宗化した。
- ・鎌倉とは比較にならない大きな谷に造られているのが特徴で、建築は明末期から清初頭に建てられ、伽藍は比較的古相を留める。
- ・中心の建築は『建長寺伽藍指図』のように直線上に並び、その両脇に付属の建築があり、僧侶たちが生活している。



天童寺を山の方から望む。主要伽藍が直線上に並んでいる

浄慈寺 (じょうじじ/じんずじ・Jìngcísi)

第四位 (浙江省杭州)

- 五代十国の954年に創建され、北宋後期の1072年に禅宗化。
- 1204年の大火災の後に再建されたが、20世紀の動乱でほとんど破壊された。
- 現在の伽藍は1990年代以降に再建されて復興し、「杭州西湖(せいこ)の文化的景観」として世界遺産に登録された。



浄慈寺の全景。主要伽藍が直線上に並んでいることがはっきり分かる

阿育王寺 (あいくおうじ/あいおうじ・Āyùwángsi)

第五位 (浙江省寧波)

- 西晋の282年に創建され、北宋の1008年に禅宗化し、南宋中期から元の時代に最盛期を迎えた。
- 明～清時代に再建された建築が中心だが、伽藍は比較的古相を留める。
- 中心の伽藍は直線上に配置され、付属建物が左右に配置されている。



阿育王寺の大雄宝殿。他の主要伽藍と共に直線上に並んでいる

その他の中国寺院

白馬寺 (はくばじ・Báimǎsi) (河南省洛陽)

後漢2代皇帝明帝が67～75年頃に建立したとされる、中国最古の仏教寺院。建築は明～清時代の様相が認められるが、全体的には近年の整備による。

少林寺 (しょうりんじ・Shàolínsi) (河南省登封)

北魏の495年に創建され、527年に達磨(だるま)を迎え、中国初の禅宗寺院となる。建築は明～清時代の様相が認められるが、20世紀の動乱による被害からの復興整備による。

延福寺 (えんぷくじ・Yánfúsi) (浙江省金華)

五代十国の927年に創建、南宋の1174年に禅宗化。規模は小さいが、全体的に古相を留めている寺院。

国清寺 (こくせいじ・Guóqīngsi) (十刹・浙江省台州)

隋の598年に天台寺院として創建、北宋の1005年に国清寺となり、南宋の1130年に禅宗化。最澄が学んだ寺院であり、伽藍は明末期から清初頭の高相を留めている。

保国寺 (ほこくじ・Bǎoguósi) (浙江省寧波)

晩唐の880年に創建され、北宋時代に禅宗化。1013年に建築の大雄宝殿ほか、伽藍は清末期を中心とする古相を留める。

現地調査を行った国内の寺院

有識者意見聴取結果を踏まえ、「鎌倉」との関連が強いと考えられる国内の禅宗寺院を中心に調査を行った。

京都五山

南禅寺 (なんぜんじ) 京都五山別格

- ・鎌倉後期の正応4年(1291年)、亀山法皇が創建の初の勅願寺で、京都・鎌倉五山の上位の最高格式。
- ・勅使門～山門～仏殿～法堂～方丈を直線上に配置するが、仏殿を欠く。山門は1628年に造られた。

天龍寺 (てんりゅうじ) 第一位

- ・室町前期の暦応2年(1339年)、足利尊氏開基、夢窓疎石(むそうそせき)開山による創建。世界遺産「古都京都の文化財の構成文化財」の構成資産。
- ・主要伽藍の直線的配置の痕跡は留めるが、桃山期の勅使門を除き、主要伽藍は近年のもの。
- ・瑞泉寺庭園を造った夢窓疎石による、大変美しい庭が特徴。

相国寺 (しょうこくじ) 第二位

- ・室町前期の永徳2年(1382年)、足利義満開基、夢窓疎石開山による創建。
- ・勅使門～放生池～山門～仏殿～法堂～方丈を直線上に配置するが、山門と仏殿を欠く。

建仁寺 (けんにんじ) 第三位

- ・鎌倉前期の建仁2年(1202年)、源頼家開基、栄西開山による創建。
- ・当初は天台・真言・禅の兼宗(けんしゅう)であったが、蘭溪道隆が1259年に11代住職になった時に純粹禅化。
- ・勅使門～放生池～山門～仏殿～法堂～方丈を直線上に配置するが、仏殿を欠く。

東福寺 (とうふくじ) 第四位

- ・鎌倉前期の嘉禎2年(1236年)、摂政の九条道家開基、円爾(えんに)開山による創建。
- 1319年の火災で焼失し、その後再建に当たり、建長寺の伽藍を参考にするため『建長寺伽藍指図』が作られた。
- ・山門は日本最古の禅宗様山門と言われている。
- ・禅堂は1347年建立で日本最大最古、東司(とうす)も室町期に造られ、浴室も日本最古。
- ・放生池～山門～仏殿～方丈を直線上に配置するが、法堂を欠く。

京都五山第五位の万寿寺(まんじゅうじ)は、現在は東福寺の塔頭(たっちゅう)禅宗寺院の敷地内にある小寺院や別坊になっているため、調査の対象外とした。

その他の国内寺院 (林下※の寺院)

妙心寺 (みょうしんじ) (京都府京都市)

- ・南北朝期の建武4年(1337年)、花園法皇が創建。
- ・江戸期建築を中心に、勅使門～放生池～山門～仏殿～法堂～庫裏を直線上に配置する整然とした主要伽藍を有する。
- ・主要伽藍周囲に多くの塔頭群が展開する大寺院。

大徳寺 (だいたくじ) (京都府京都市)

- ・鎌倉末期の正和4年(1315年)、宗峰妙超が創建。
- ・妙心寺同様、江戸期建築を中心に、勅使門～山門～仏殿～法堂～庫裏を直線上に配置する整然とした主要伽藍を有する。
- ・主要伽藍周囲に多くの塔頭群が展開する大寺院。

※林下とは、臨済宗を中心とする禅寺の中で、幕府の統制下にあった五山に対して、在野の寺院を指す呼び方。修行に専心する禅風が特色。

比較研究成果の概要

立地

- ①中国においては、天童寺、阿育王寺、国清寺は谷あいに立地するが、谷の規模が大きく、建長寺等の**鎌倉の狭い谷戸とは大きく異なる。**
- ②他の中国寺院は、山岳(径山寺、靈隠寺)、山裾(浄慈寺、少林寺、延福寺、保国寺)、平地(白馬寺)に立地する。
- ③京都五山、妙心寺及び大徳寺については、**南禅寺及び天龍寺が山裾に立地する他は、すべて町中の平地に立地**する。建長寺の谷戸造成とは全く異なる。

- ①南宋五山のすべてと少林寺、国清寺、保国寺は円覚寺が取り入れたように**斜面を雛壇(ひなだん)造成**しており、天童寺においてはその傾向が特に顕著である。
- ②鎌倉を除く**国内の寺院では、立地上、平地造成がほとんど**である。
- ③**中国の寺院、国内の寺院とも、鎌倉の寺院に見られる、谷あいの山裾を垂直に切り落とし、直線的な境内を確保する谷戸造成は認められない。**

造成

伽藍配置

- ①南宋五山をはじめ、中国の寺院はすべて、**主要伽藍**(放生池、門、仏殿、法堂(はっとう)他)**は一直線に配置され、それを軸線として左右対称に附属建物を配置**している。
- ②南宋五山をはじめとする中国寺院においては、建長寺方丈庭園のような、建物奥に曲池を配する庭園は認められない。
- ③京都五山、妙心寺及び大徳寺(国内の大禅宗寺院)についても、**中国寺院同様、主要伽藍を直線配置**とする。

まとめ

相違点

- 狭隘(きょうあい)な谷戸に立地し、山裾を垂直に切り落として境内を確保する造成は、鎌倉の寺院固有の立地及び造成法である。
- 方丈奥の曲池を伴う庭園は、建長寺から発生した日本独自のあり方であり、建長寺方丈庭園は禅宗庭園の始まりと言える。

共通点

- 建長寺の伽藍は、創建当初を示すとされる『建長寺伽藍指図』に描かれた一直線上の主要伽藍の配置を踏襲するが、この配置は現在の中国においても踏襲されており、開山の蘭溪道隆自らが修行した南宋五山に倣ったものである。
- 京都五山をはじめとする国内の大禅宗寺院は、南宋五山から導入された建長寺の伽藍配置に倣ったものである。

結論

建長寺の直線的な主要伽藍配置は、中国南宋五山との交流によって導入され、方丈奥の庭園（後方苑池）という新規の要素を交えて、我が国における伽藍配置の基本的あり方として大禅宗寺院に取り入れられ、現在も維持されている。この意味において、**建長寺は日本における禅宗寺院の**（伽藍配置などの物理的な部分の）**始まり**であると言える。

建長寺 高井 正俊 総長 (当時) の講話



日本人は、情緒的に物事の価値を判断していく傾向がありますが、「誰が見ても、誰が聞いても分かるようにしなさい」ということをイコモス(国際記念物遺跡会議)は指摘しているのだと思います。

そもそも建長寺は、中国の禅文化を日本に広めるため、径山寺を真似て造られたと古来より伝えられています。時のスポンサーである北条時頼と北条一族は、

鎌倉に禅文化や南宋文化をそっくり取り入れてしまおうと考え、建長寺を建てました。こうした背景もあって、建長寺の主要伽藍の配置は禅の修行に最適な造りになっています。

実は建長寺こそ、日本の禅の歴史の始まりです。蘭溪道隆という中国の禅僧が、北条時頼に建長寺を建ててもらった当時、日本には、純粹に禅を学ぶための寺院がありませんでした。そのため、日本全国から禅僧が鎌倉に集まって来て、その後、円覚寺が出来て京都にも禅寺が出来ていきました。思想的にも鎌倉が禅文化のルーツと言えます。

鎌倉と建長寺を抜きにして日本の禅宗と禅文化は語れない、とても大事な場所であるということをご認識いただけたら幸いです。



第
2
回

禅宗様建築の 成立と発展

平成28年2月21日実施講座
於 円覚寺

連続講座の第2回は円覚寺舍利殿に注目し、禅宗様建築が中国から日本へ伝わり、さらには日本全国へと波及していったことを物語る重要な物証であるということを、現地調査結果を基に報告を行いました。

円覚寺舎利殿が持つ禅宗様建築の特徴

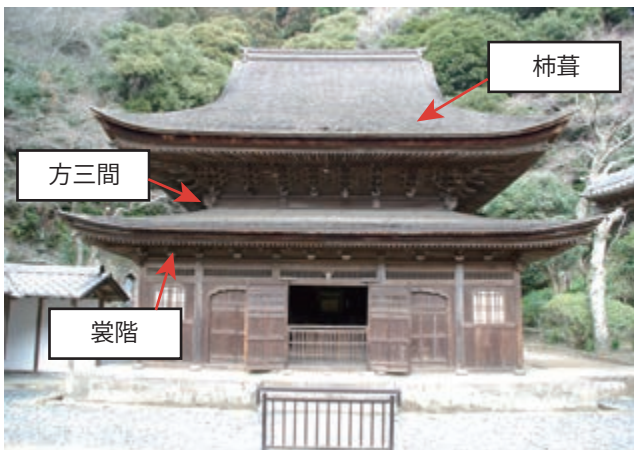
円覚寺舎利殿について

裳階(もこし)付、方三間(ほうさんげん)の仏殿で15世紀前半に建築された太平寺仏殿を16世紀に移築。1407年築の正福寺地藏堂(東京都東村山市)に極めて類似していることから同時代のものと推定でき、禅宗様建築の諸要素を完備する、我が国における禅宗様建築の典型、完成形であると言える。

建物について

方三間(ほうさんげん)裳階(もこし)付という形式で、三間四方の建物の周りに裳階という下屋根を付けて室内の空間を広げたもの。屋根は、木材の薄板を厚く重ねて葺いた柿葺(こけらぶき)である。

さらに、三角形をした母屋が内側に入っている「入母屋造り(いりもやづくり)」となっている。壁は板張りで、豎板で張る「豎板張(たていたばり)」が基本である。



床について

舎利殿の床は土間である。方三間の禅宗様仏殿は土間が基本であり、柱を建てる際に必要な「礎盤(そばん)」は石製となっている。柱の上部には「粽(ちまき)」が見られる(円覚寺山門では粽は柱の上下に見られる)。



用語解説

裳階(もこし):軒下の壁面に取り付けられた庇状の構造物。元来は風雨から構造物を保護するために付けられたもの。

粽(ちまき):柱の上下端が細く丸められた部分のこと。禅宗建築とともに入り、寺院建築に用いられた。

仏殿内部の中心には、本尊を安置する「須弥壇(しゅみだん)」があり、通常は須弥壇に「高欄(こうらん)」を設ける。ここでは仏舎利を納めた「厨子(ずし)」が安置されている。

なお、円覚寺舎利殿の須弥壇は、国の重要文化財の指定を受けている。



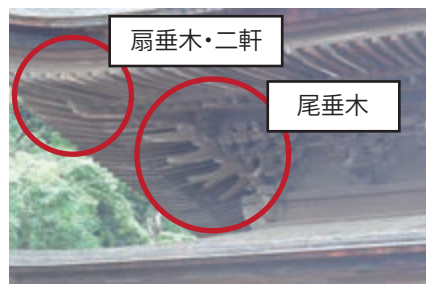
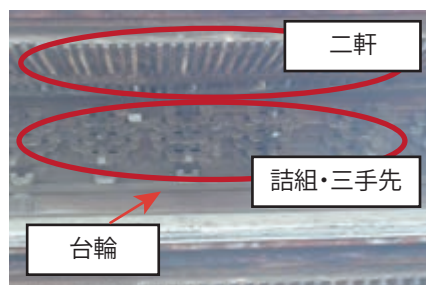
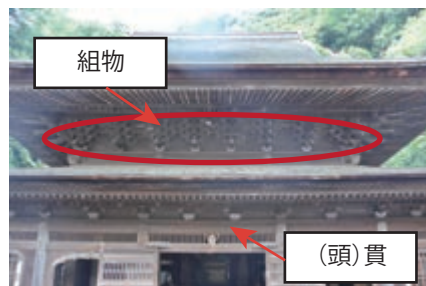
組物(くみもの)について

技術的な粋を集めた、非常に装飾性の高い禅宗様建築の最大の特徴ともいえる。その細部を見ていくと、臍(ほぞ)を切って内部の柱材を水平に何本も貫通させる「貫(ぬき)」という技法が見られる。

さらに、組物は重量があるため、本来は柱の上のみ乗せるのが無難であるが、装飾性を高めるためにあえて柱と柱の間に組物を置いていく「詰組(つめぐみ)」という技法も大きな特徴である。強度を確保するため、「台輪(だいわ)」という厚い板を渡し、その上に組物を乗せるという技法がとられている。

組物はその段数によって豪華さを競っている。古い建築物であると、段数が一段・二段であることも多く、これを「一手先(ひとてさき)・二手先(ふたてさき)」という。舎利殿の組物は三段で、「三手先(みてさき)」という。

手先は天狗の鼻のような形状の「尾垂木(おだるき)」の本数で数える。尾垂木の反り方が強くなればなるほど、木材を削る部分が多くなるため、豪華な造りと言える。



軒について

母屋の屋根の下地となる垂木は二段並んでおり、これを「二軒(ふたのき)」と呼ぶ。また、この垂木は扇状(放射状)に配置された「扇垂木(おうぎだるき)」になっており、非常に華やかな技法がとられている。

扇垂木は、隅木に対して最後まで沿うかたちになるのが特徴。それに対して、裳階に見られる平行垂木は、軒の角部分において隅木に対して垂木を突き刺しており、扇垂木と大きく異なる。



小屋裏について

内部は軒や屋根裏の小屋組が見えるだけではなく、組物や垂木などが整然と美しく見える「化粧屋根裏(けしょうやねうら)」という技法で装飾性を高め、全面に天井を張らないことを特徴としている。

「大虹梁(だいこうりょう)」という大きな梁が母屋と裳階の柱をつないでおり、さらに、内部の柱を省くため、ビール瓶を逆さまにしたような形状の「大瓶束(たいへいづか)」を虹梁の上に設置することにより上部の荷重を支えている。



天井(てんじょう)について

須弥壇の上は四角く平らに天井が造られている。これを「鏡天井(かがみてんじょう)」といい、円覚寺舍利殿の大きな特徴となっている。



窓について

窓は、釣鐘状の「花頭窓(かとうまど)」が用いられている。花頭窓は禅宗様に伴って日本に伝えられたもので、古い建築物は比較的直線的だが、新しいものになるほど、曲線的で末広がりになっている。



欄間(らんま)について

軒には「拳鼻(こぶしばな)」下に、「波型連子(なみがたれんじ)」とも呼ばれる「弓欄間」が装飾されている。この弓欄間も禅宗様建築の豪華さの表れの一つと言える。



用語解説

拳鼻(こぶしばな):こぶし状の木鼻(きばな)。木鼻とは貫(ぬき)や台輪などが柱から突き出している部分のこと。円覚寺舍利殿には、絵様線形(えようくりがた)と呼ばれる、彫りなどの装飾が施されている。

扉について

周囲に枠をつくり、中に薄い板を入れた「棧唐戸(さんからど)」と呼ばれる扉が用いられている。中に蝶番などのない外付けの扉で、上下には扉の回転軸の軸受けとなる「藁座(わらざ)」が設けられている。



中国の方三間仏殿と 円覚寺舍利殿との類似点

禅宗様建築の祖型となる建物

保国寺大殿(ほこくじたいでん)(浙江省寧波)、延福寺大殿(えんぶくじたいでん)(浙江省金華)、天寧寺大殿(てんねいじたいでん)(浙江省金華)、真如寺正殿(しんによせいでん)(上海)の4つの建築物を現地調査した。

このうち、保国寺大殿と延福寺大殿は裳階があり、両者ともシルエットが円覚寺舍利殿に似通っている。規模は延福寺大殿が円覚寺舍利殿とほぼ同程度の大きさとなっている。一方、天寧寺大殿と真如寺正殿には裳階がない。



円覚寺舍利殿



保国寺大殿



延福寺大殿



天寧寺大殿



真如寺正殿

円覚寺舍利殿と中国の方三間仏殿の詳細比較一覧

対象		屋根等	床	礎盤	粽	貫	台輪	組物	尾垂木	軒 (左母屋、右裳階)	
円覚寺舍利殿	15世紀前半	裳階付 入母屋柿葺 軒反強	土間	石製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
保国寺大殿	1013年	裳階付 入母屋瓦葺 軒反強	石敷き	石製	有	有	無	詰組 四手先 肘木反弱	反強	平行垂木 一軒	平行垂木 一軒
延福寺大殿	1317年	裳階付 入母屋瓦葺 軒反強	石敷き	石製	有	有	無	詰組 三手先 肘木反弱	反強	平行垂木 一軒	平行垂木 一軒
天寧寺大殿	1318年	入母屋瓦葺 軒反強	石敷き	石製	有 (副柱頂部)	有	無	詰組 三手先 肘木反弱	反強	扇垂木 二軒	無
真如寺正殿	1320年	入母屋瓦葺 軒反弱	石敷き	石製	有	有	有	詰組 一手先 肘木反弱	反強	扇垂木 二軒	無

対象		梁・構架	天井	窓	欄間	拳鼻	扉	壁	須弥壇	高欄	絵様 線形
円覚寺舍利殿	15世紀前半	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子 (弓欄間)	有	棧唐戸、 藁座有	竖板張	有	有	有
保国寺大殿	1013年	虹梁 大瓶束	化粧屋根裏	格子窓	波型連子	有	格子唐戸、 藁座無	漆喰土壁	有	無	無
延福寺大殿	1317年	大虹梁	格天井 化粧屋根裏	連子格子	無	有	棧唐戸、 藁座有	漆喰土壁	有	無	有
天寧寺大殿	1318年	虹梁 大瓶束	化粧屋根裏	格子窓	無	無	格子唐戸、 藁座有	漆喰土壁	無	無	無
真如寺正殿	1320年	虹梁 大瓶束	化粧屋根裏	花頭窓	無	有	格子唐戸、 藁座有	漆喰土壁	有	有	有

水色塗り は円覚寺舍利殿との共通点 (ただし、屋根等については裳階、組物については詰組で比較。)

類似点について

礎盤 (そばん)

調査した中国の4つの建築物の礎盤は全て石製。延福寺大殿の裳階部分の礎盤は、円覚寺舍利殿のものと大変よく似ている。保国寺大殿の内部の礎盤は非常に豪華な造りになっている。天寧寺大殿と真如寺正殿の礎盤は、円覚寺舍利殿の物より細身ではあるものの形状はよく似ていると言える。



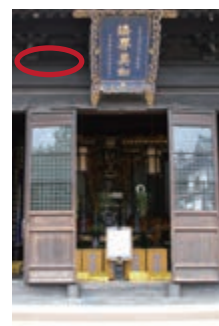
円覚寺舍利殿の礎盤



延福寺大殿の礎盤

粽(ちまき)・貫(ぬき)・台輪(だいわ)

円覚寺舍利殿のような粽や貫は、保国寺大殿、延福寺大殿、天寧寺大殿、真如寺正殿のいずれにも見られる。台輪については、真如寺正殿のみ確認できた。



真如寺正殿の台輪

組物(くみもの)・尾垂木(おだるき)・軒

手先の数は建築物によってばらつきはあるものの、保国寺大殿、延福寺大殿、天寧寺大殿、真如寺正殿のいずれも詰組であり、日本の初期禅宗寺院の建築時においてもその技法が取り入れられたと考えられる。



円覚寺舍利殿同様、延福寺大殿の尾垂木も強く反っている



延福寺大殿の詰組

天井

中国の禅宗寺院建築物は、基本的に天井を張らずに化粧屋根裏のまま見せる仕様になっていることが多い。ただし、延福寺大殿の天井は格天井であるが、縁や棧を取り払えば、ほぼ円覚寺舍利殿に見られる鏡天井と同様であることが確認できた。



延福寺大殿の天井



円覚寺舍利殿の鏡天井

窓・欄間(らんま)

花頭窓は、真如寺正殿で確認できた。中国禅宗寺院にはあまり欄間は見られないが、円覚寺舍利殿と同様の弓欄間は、保国寺大殿にのみ見られた。



真如寺正殿の花頭窓



保国寺大殿の波型連子(弓欄間)

拳鼻(こぶしばな)・絵様線形(えようくりがた)

延福寺大殿、真如寺正殿では、円覚寺舍利殿に似た拳鼻が見られた。保国寺大殿も、断定はできないが拳鼻らしきものを確認できた。中国寺院の場合、絵様線形は非常に多くみられる特徴となっている。



延福寺大殿の拳鼻・絵様線形



真如寺正殿の拳鼻・絵様線形

棧唐戸(さんからど)・須弥壇(しゅみだん)

延福寺大殿で確認できた棧唐戸は、円覚寺舍利殿のものと大変よく似ている。保国寺大殿や真如寺正殿では石製の須弥壇が見られた。延福寺大殿にも、石製の須弥壇らしきものが確認された。



延福寺大殿の棧唐戸



真如寺正殿の須弥壇

円覚寺舍利殿と国内の方三間仏殿の詳細比較一覧

グループ	対 象	屋根等	床	礎盤	粽	貫	台輪	組物	尾垂木	軒 (左母屋、右裳階)		
	円覚寺舍利殿	15世紀前半	裳階付 入母屋柿葺 軒反強	土間	石製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
A群	永保寺観音堂	1314年 年輪年代は 1450年代	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反大強	板敷き	無	有	有	有	その他 二手先 肘木反弱	無	垂木無 板張り	垂木無 板張り
B群	功山寺仏殿	1320年	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反強	四半敷 塙 <small>(せん)</small> 敷き	木製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
B群	正福寺地藏堂	1407年	裳階(銅板葺)付 入母屋柿葺 軒反強	土間	木製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
C群	清白寺仏殿	1415年	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反強	土間	木製	有	有	有	詰組 二手先 肘木反強	反強	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
D群	安国寺釈迦堂	室町中期	入母屋瓦葺 軒反強	四半敷 石敷き	石製	有	有	有	詰組 二手先 肘木反強	反弱	平行垂木 二軒	無
C群	東光寺薬師堂	室町後期	裳階付 入母屋檜皮葺 軒反強	土間	木製 裳階部無	有 (裳階角柱)	有	有	詰組 一手先 肘木反強	無	扇垂木 二軒	平行垂木 一軒
D群	不動院金堂	1540年	裳階(吹放し)付 入母屋柿葺 軒反強	土間	木製	有	有	有	詰組 三手先 肘木反強	反弱	扇垂木 二軒	扇垂木 二軒

グループ	対 象	梁・構架	天井	窓	欄間	拳鼻	扉	壁	須弥壇	高欄	絵様 線形	
	円覚寺舍利殿	15世紀前半	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子 (弓欄間)	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
A群	永保寺観音堂	1314年 年輪年代は 1450年代	海老虹梁 のみ	鏡天井	無	波型連子 母屋扉上段格 子状欄間	有	格子唐戸、 藁座有	横板張	有	有	有
B群	功山寺仏殿	1320年	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	無	有
B群	正福寺地藏堂	1407年	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
C群	清白寺仏殿	1415年	海老虹梁 のみ	鏡天井	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
D群	安国寺釈迦堂	室町中期	海老虹梁 大瓶束	鏡天井	無	波型連子	有	格子唐戸、 藁座有	上段漆喰 縦板張	有	有	有
C群	東光寺薬師堂	室町後期	海老虹梁 のみ	竿縁天井	その他	無	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有
D群	不動院金堂	1540年	海老虹梁 大瓶束	鏡天井 化粧屋根裏	花頭窓	波型連子	有	棧唐戸、 藁座有	縦板張	有	有	有

黄色塗りは円覚寺舍利殿との相違点 (ただし、屋根等については裳階で比較。)

調査した国内寺院建築物を、4つのグループに分類

A群: 永保寺観音堂



永保寺観音堂

文献資料によると円覚寺舍利殿に先行している。中国建築と和様の融合(反りの強さ、縁側があること)が見られ、禅宗様建築の初期段階の建築物と言える。

円覚寺舍利殿との主な相違点

- 1 軒反りが非常に強い(中国的)
- 2 前面裳階部は吹放しで縁が設けられている
- 3 内部の床は板敷
- 4 礎盤は無い(礎石に直付け)
- 5 二手先の組物
- 6 尾垂木は無い
- 7 軒は板張りで垂木が無い
- 8 梁・構架は海老虹梁のみ(大瓶束はない)
- 9 天井は全面板張り(鏡天井)
- 10 窓は無い
- 11 扉は格子扉
- 12 壁は横板張り

B群: 功山寺仏殿、正福寺地藏堂

永保寺観音堂と円覚寺舍利殿をつなぐ一群であり、舍利殿に最も近似する一群と言える。

円覚寺舍利殿との主な相違点

- 1 床が四半敷(功山寺仏殿)
- 2 礎盤が木製(功山寺仏殿、正福寺地藏堂)



功山寺仏殿の木製礎盤



正福寺地藏堂の木製礎盤

C群: 清白寺仏殿、東光寺薬師堂

円覚寺舍利殿とほぼ同時期のものであり、外観の印象は近似する一群であるが、B群より舍利殿との相違点が多い一群である。

円覚寺舍利殿との主な相違点

<清白寺仏殿>

- 1 礎盤が木製
- 2 二手先の組物
- 3 天井は全面鏡天井(化粧屋根裏がない)
- 4 梁・構架は海老虹梁のみ

<東光寺薬師堂>

- 1 礎盤が木製
- 2 一手先の組物
- 3 尾垂木が無い
- 4 梁・構架は海老虹梁のみ
- 5 天井は竿縁(さおぶち)
- 6 花頭窓ではない
- 7 欄間が無い



清白寺仏殿の天井は化粧屋根裏なし



東光寺薬師堂の天井は竿縁あり

D群: 安国寺釈迦堂、不動院金堂

円覚寺舍利殿に後続する一群で、舍利殿とは形態或いは規模が異なるため、舍利殿との共通点は少ない。

まとめ



保国寺大殿



天寧寺大殿



延福寺大殿



真如寺正殿



『円覚寺境内絵図』
出典：鎌倉市教育委員会
『史跡円覚寺境内・名勝及
史跡円覚寺庭園 保存管理
計画書』



功山寺仏殿



繊細化
精巧化



円覚寺舍利殿

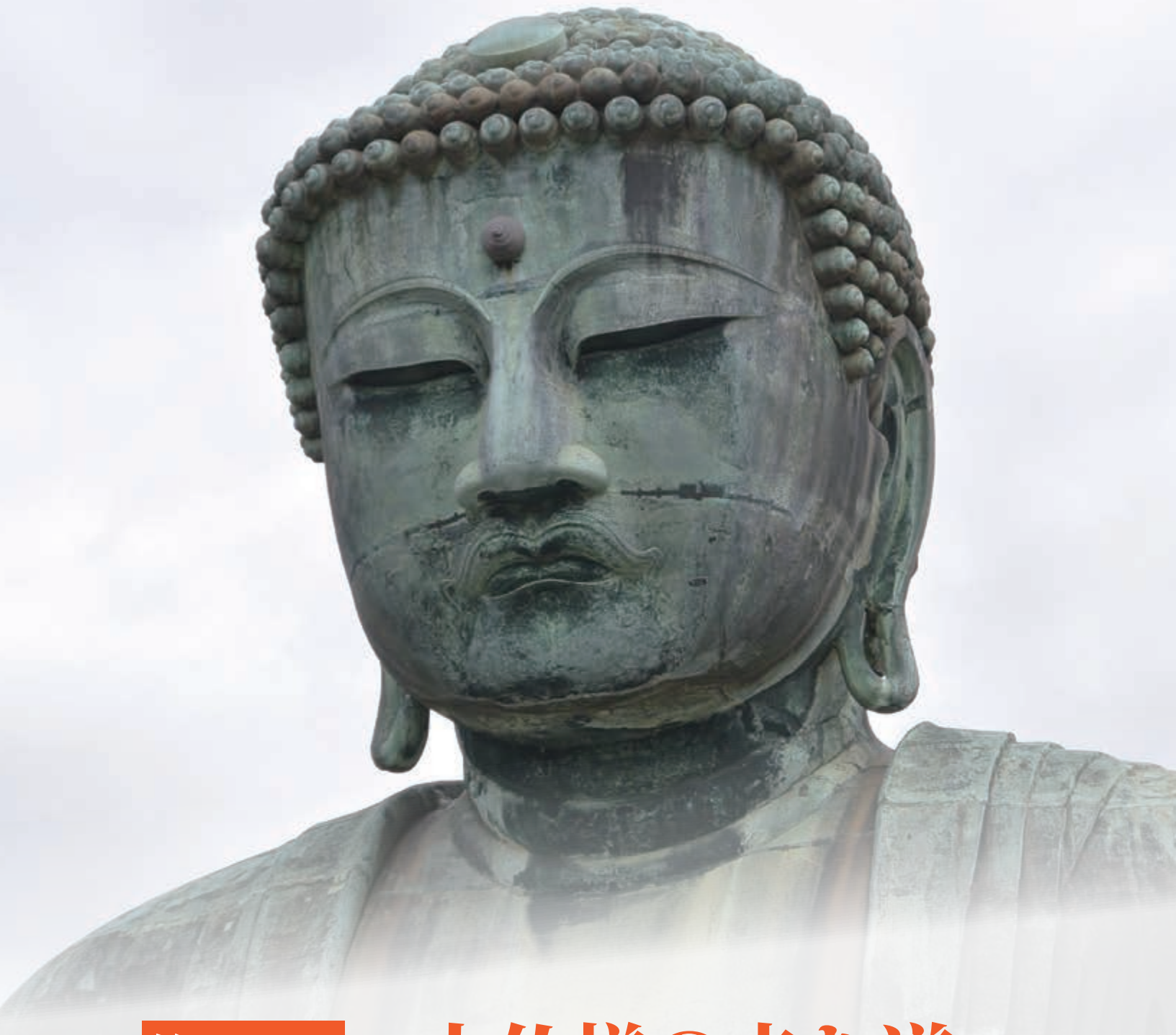


様式的変化



不動院金堂

- 中国 4 寺院の大殿（正殿）と円覚寺境内絵図に描かれている仏殿部分を比較すると、非常によく似ていることが分かる。境内絵図にある建物は裳階付であり、花頭窓や組物のはっきりと描かれている。
- 我が国の禅宗様建築は明らかに**中国、特に江蘇省・浙江省の北宋から元にかけての時代の建築様式の諸要素を取り入れて成立**したと言える。
- 15 世紀前半に建築された円覚寺舍利殿は、先行する永保寺観音堂や功山寺仏殿などの様式を、**さらに繊細かつ精巧に技術面・装飾面において進化させた禅宗様建築の典型・完成形**と評価できる。
- 禅宗様建築は、円覚寺舍利殿を典型として、室町時代中期以降の安国寺釈迦堂、東光寺薬師堂、不動院金堂などに様式的変化（省略等）を伴いながら引き継がれ、**我が国における寺院建築様式として一般化し全国に拡散した。**
- ただし、安土桃山時代以降は禅宗様にも大きな変化が生じた。簡略化ではなく豪華さが追及されるようになり、江戸時代以降は四手先の組物の登場や、詰組もより複雑になる傾向が見られるようになる。
- 円覚寺舍利殿は、**中国から日本へ伝わり、さらには日本全国へと禅宗様建築が確実に波及していったことを物語る重要な物証**であると言える。



第
3
回

大仏様の来た道

平成28年3月27日実施講座
於 高德院

鎌倉のシンボリック的存在でもある鎌倉大仏。しかしその創建に関わることはいまだ多くの謎に包まれています。連続講座の第3回では、海外の現地調査をもとに、大仏の起源や伝来ルートを探り、報告を行いました。

中国現地調査の概要

中国の世界遺産の構成資産について、下記のとおり平成26年から27年にかけて現地調査を行った。

資産名称	所在地	時代	備考
雲崗石窟	山西省大同市	北魏	中国仏教彫刻初期の盛期、西方の様式の影響
龍門石窟	河南省洛陽市	北魏～唐	大同からの遷都、様式の中国化
敦煌莫高窟	甘肅省敦煌市	北涼～元	シルクロード、西方様式と中央様式の混交
樂山大仏	四川省樂山市	唐	世界最大級の大仏
大足石刻	重慶市大足県	唐～南宋	仏教、儒教、道教の混交

雲崗石窟(うんこうせきつ)

北魏王朝はおおむね中国北方を支配していたいわゆる「外来民族」である。非常に軍事力には長けており、北方より中原を目指して進軍し、建国した。軍事力・経済力・政治権力には卓越していたが、中国の漢文化に対する劣等感があったであろうと推測される。そこで、当時流行していた西方から伝来した仏教を導入することで、国の運営の安定を図ったのではないかと考えられている。

仏教導入に当たり、王朝の中でも権力闘争があり、北魏において廃仏(仏教の排斥・弾圧)も行われ、僧侶の還俗や仏像の破壊も強要されるようになった。一旦は下火になるが皇帝の交代により再度、仏教を宣揚するべく様々な仏像が造られるようになり、その一環として雲崗石窟が登場する。このように、初期の仏教美術は当時の政治等と連動して展開していることが多い。

特に雲崗石窟の場合、異民族として中国を支配していたため、仏像を造像する職人を自前で養成していたわけではなく、すでに造像が活発であったシル

クロードエリア(西方地域)から十万人単位で職人を都のそばに置き、造像にあたらせたという背景がある。したがって、大同周辺の工人・仏師が中心となって造像に当たったのではなく、西方から連れてこられた職人が造像に当たったということが、西方様式が雲崗石窟の特徴となった大きな要因である。

龍門石窟(りゅうもんせきつ)

北魏から唐にかけての作品が中心で、所在地は河南省の洛陽市である。北魏王朝が大同から遷都を行い、その結果として、都にほど近い場所に仏教隆盛の風を受けて石窟の造像・開削が展開した。

雲崗石窟と異なり、龍門石窟の場合、すでに遷都という建国からしばらくたった時代の開削ということもあり、徐々に作風が中国化していく。(顔や着衣など)雲崗石窟が西方様式の色濃い特徴があるのに対し、龍門石窟は中国独自の仏像様式がはっきり見て取れるものになっている。

敦煌莫高窟(とんこうぼっこうくつ)

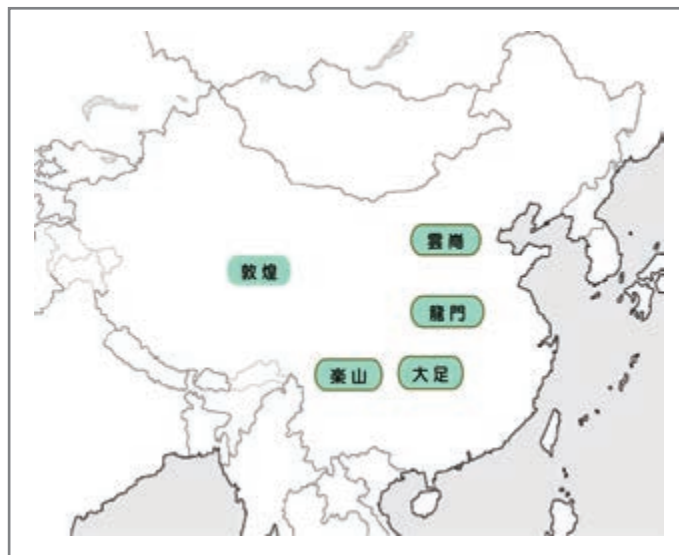
五胡十六国時代の北涼から(実際はもう少し早い4世紀あたりから)元にまで至る約千年に渡って作品が製作されている。シルクロードの西方様式と中国大陸の中央様式がミックスしているというのが大きなポイントの一つである。

樂山大仏(らくざんだいぶつ)

世界最大級の仏像(高さ約70m)。四川省樂山市に流れる三本の河川が合流する地点の崖に彫られている。唐時代の作品と考えられる。

大足石刻(だいそくせつこく)

重慶市に所在する。唐から南宋時代(9世紀から13世紀ごろ)の作品が中心である。石窟は崖面を深く穿って奥行きのある空間を造るのに対し、石刻は岩を浅く彫って整えて造る



という違いがある。鎌倉大仏と比較的時代が近く、全体のテーマが、仏教と儒教・道教の混交といったように、より人々の生活に身近な信仰が仏教に浸透してきているのが特色である。

大仏 — 仏像の大きさについて

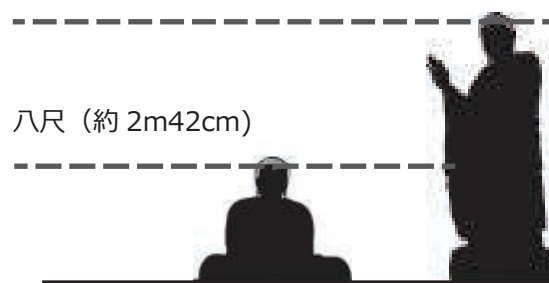
丈六像(じょうろくぞう)

仏像の大きさは、鬚(まげ)がある場合もあり、頭頂高では大きさを示すのに不便であるため、髪の毛の生え際で示すことが一般的である。これを髮際高(はっさいこう)という。

『造像量度經(ぞうぞうりょうどきょう)』(中国・清時代翻訳)等の經典に「丈六(一丈六尺)」の記述があり、一般的に「丈六像」は「大きなほとけ様」を指すと考えられる。

しかし、鎌倉大仏の高さは11.39mあるため、我々は調査対象をおおむね10m前後以上の仏像とした。

一丈六尺 (約 4m85cm)



坐像の場合
半分の八尺

立像で
一丈六尺

鎌倉大仏の造形的な特色

正面から見た特色

印相についてみると、鎌倉時代に流行していた阿弥陀如来像は常楽寺(鎌倉市)の阿弥陀如来坐像のように来迎印を結ぶ像が多かったが、鎌倉大仏は定印を結んでいる。着衣は、鎌倉大仏は左右対称の通肩であるのに対し、常楽寺阿弥陀如来坐像は、右肩に少し衣をかける偏袒右肩(へんたんうけん)である。

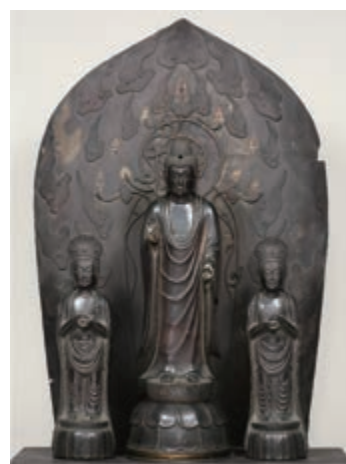
また、鎌倉時代に流行していた善光寺式阿弥陀如来像のうち、代表作としてあげられる円覚寺の阿弥陀如来立像は左右対称の通肩であり、鎌倉大仏と共通している。



高德院 阿弥陀如来坐像
・通肩(つうけん)
・定印(じょういん)



常楽寺 阿弥陀如来坐像
・偏袒右肩(へんたんうけん)
・来迎印(らいごういん)



円覚寺 阿弥陀如来及び両脇侍立像
・通肩



高德院 阿弥陀如来坐像(左側面)
伏し目がちでやや前傾姿勢である。
また、衣文線の彫り込みもしっかりしている



常楽寺 阿弥陀如来坐像(左側面)
鎌倉大仏に比べてそれほど前傾姿勢ではない

側面から見た特色

やや前傾姿勢で、伏し目がちである。頭部が前に傾く様子は、中国からもたらされた泉涌寺の観音菩薩坐像と似通っている。常楽寺阿弥陀如来坐像はそれほど前に傾いておらず、違いが際立っている(写真の線①を参照)。

一方、泉涌寺観音菩薩坐像との相違点として、同像は衣文が必要最小限の彫り込みなのに対して、鎌倉大仏は特に肘部分から背中にかけての衣文線がしっかり彫り込まれており、細部への造形意識がより高かったと言える(写真の②を参照)。

中国の作例との比較

雲崗石窟～曇曜五窟(どんようごくつ)

曇曜五窟の五体はそれぞれ歴代皇帝になぞらえられている。第18窟の如来立像は全身の衣表面部分に小さい化仏(けぶつ)のようなものが彫りこまれている。つまり、たくさんの仏像の集合体(言い換えると宇宙を構成している)という理念で制作されたと考えられる。この「宇宙と合致してこの世のすべてを支配しているのが中国の皇帝である」という理念と合致させるために大仏の造像を推進していった。

特に有名なのが第20窟の如来坐像である。頭頂部の肉髻(にっけい)は大きく飛び出ている(時代的には古い)が鎌倉大仏は比較的なだらかである。如来坐像は

口角が上がっており、笑みを浮かべたような表情なのに対して、鎌倉大仏はそれほど口角は上がっていない。如来坐像の耳は正面に前開きになっており、耳全体を見せるような造形なのに対し、鎌倉大仏は耳たぶは正面から見えるものの、耳上部は顔で隠れるような造形になっている。如来坐像は偏袒右肩なのに対し、鎌倉大仏は通肩である。如来坐像は臂(ひじ)を左右に大きく張り出しているのに対して、鎌倉大仏は臂幅は肩幅とあまり変わらない。肉身表現については如来坐像は衣が薄く肉身部分の露出が多いのに対し、鎌倉大仏は肉身部分は首から腹部上部にかけてのみU字型に露出しているだけにとどまっている。



第18窟 如来立像



第20窟 如来坐像



高德院 阿弥陀如来坐像

龍門石窟

龍門石窟 奉先寺洞 中尊の盧舎那仏坐像(るしゃなぶつざう)の頭髪は波形なのに対して、鎌倉大仏は螺髪(らぼつ)である。盧舎那仏坐像は脚部と両手は損失しているが通肩であるという点は鎌倉大仏と一致する。ただし、衣文が非常に薄く表現されているので、鎌倉大仏と比較すると肉身部分の量感が強調されている。この盧舎那仏坐像の建立には、則天武后が費用を出したとされる。



奉先寺洞 中尊 盧舎那仏坐像

敦煌莫高窟

全国各地に大雲寺を創るという中央からの指示のもと、造立された。第96窟(唐時代)と鎌倉大仏を比較すると、鎌倉大仏は自然な肉取りであるのに対し、敦煌莫高窟の大仏は肉髻が大きく突出しており、目鼻立ちも大きい。顔だちも豊満で張りがある。



第96窟 弥勒仏坐像(面部)



高德院 阿弥陀如来坐像(面部)

楽山大仏

右面部を鎌倉大仏と比較すると、面部の肉取りは鎌倉大仏が自然なふくよかさで人間的な顔だちなのに対し、楽山大仏は肉髻の突出や頭部形状が三角形に近く、面部

全体が平面的・概念的な造りになっている。

敦煌莫高窟までの大仏が国家レベルでの造像であったのに対し、在地有力者による製作へと施主の変化がみられる。



楽山大仏 弥勒仏坐像(全景)



弥勒仏坐像(右面部)



高德院 阿弥陀如来坐像(右面部)

大足石刻

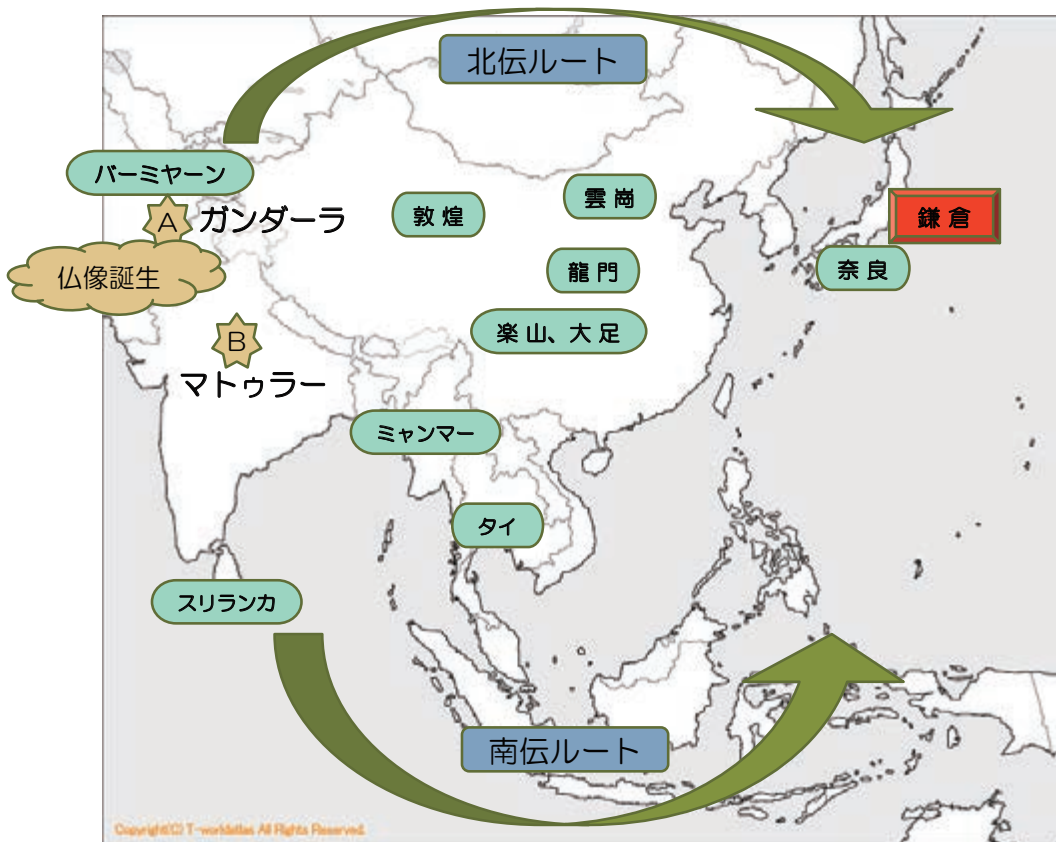
坐像、立像での大仏は存在せず、大型の像は涅槃像が伝わるのみであるため、単純な造形的比較は難しい。在地の有力者による発願である点は、楽山大仏と共通する。



宝頂山石刻 仏涅槃像

大仏の伝来ルート

仏像が誕生したのは、AのガンダーラやBのマトゥラーといった地で、今回調査を行ったのは下図の北伝ルート上にある仏像である。



北伝ルート

北伝ルートにおいて大仏造像の歴史をたどっていくと(石窟自体の古さとは関係なく)、まず雲崗のインド風の西方様式から始まって龍門石窟では中国風の様式へと大きく変化する。さらに、敦煌のように中央政府(中原)からの影響力が加わったのち、楽山や大足に大仏の理念といったものが受け継がれていった。

南伝ルート

スリランカ、ミャンマー、タイにも古い大仏は点在しており、これらはいわば「南伝ルート」ということができる。仏像を大きくすることでより大きなものにすがりたい、功德を増したいという思想は、北

伝ルートだけに限った話ではなく、南伝ルートも含め仏教が伝わった各地で見られるものである。この南伝ルートが、奈良・鎌倉に直接的に影響を与えたとは現時点では想定しづらいが、その思想は両ルートから受け継がれ、東端の日本に集約されたということは十分考えられる。

一方で、仏教発祥地のインドには大仏がほとんど現存せず、むしろ発祥地から離れたルート上に作例が多い。これは、そうした周辺地域における聖地への憧れや境界意識を解消しようとする意思が大仏造立につながったのではないかと考えられる。当然、造立に当たっては強大な経済力・権力といった裏付けが必要である。

まとめ

龍門石窟研究院の研究者から「13世紀に青銅の大仏が作られることは素晴らしく、もっと前に世界遺産に登録されているべきものである」との意見をいただいた。

さらに、敦煌研究院からは「海のシルクロードという視点で鎌倉大仏を考えてみるのもいいのではないか」との意見をいただいた。

鎌倉大仏は**北伝ルートで伝来した巨大仏信仰のアジア東端の作例として大変貴重**である。

今後は、①国内作例との比較研究を、近世の作例も含めて行うこと、②大仏造立に関わる思想、配置、礼拝者等との関係性をさらに明らかにしていくことを課題として調査をさらに進めていく。

高德院 佐藤 孝雄 ご住職の講話



ご承知のように2016年の1月13日から3月10日まで、国庫補助金を使わせていただいて、大仏様の保存修理事業をさせていただきました。50年に一度の大きなご尊像の「健康診断」に当たる事業を、当山は10年以上かけて準備して参りました。それがちょうど今終わったところでございます。

このご尊像の創建に関わることはほとんど分かっていない、というのが鎌倉の大仏様の大きな特徴になっております。中世文書に当たる物にも大仏様の創建に関わる記録はほとんどございません。北条得宗家の正史『吾妻鏡』にも鑄造物に関す

る記述はたった1か所だけです。「建長四年の八月上」にほんの数行だけ出てくるだけでございます。

そのようなこともありまして、我々も大きな目標を持って、今回の調査をさせていただきました。「クリーニング」ということでしたが、内実はかなり、ご尊像に関わる調査が入っております。例えば、ご尊像に残っている金も、メッキなのか金箔だったのかといったことすら分かっていません。

そのような中で、当山では過去20年くらいかけてご尊像の多角的な調査研究を続けて参りました。少しずつ様々な方面から新たな知見が得られつつあります。今日の連続講座のお話からも、来歴に不明な点が多いご尊像の創建に関わることをご示唆いただけたのではないのでしょうか。本日は多数の方にご参加いただき、ありがとうございました。



第

4
回

やぐらの広がり

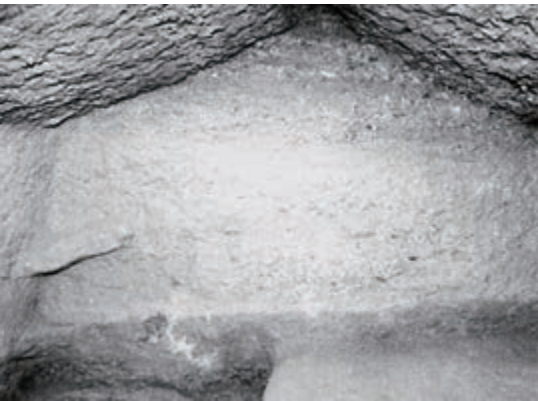
平成28年6月26日実施講座
於 浄光明寺

鎌倉独特の宗教空間を構成する稀有な遺構である「やぐら」。連続講座の第4回は、房総半島、東北、北陸、九州などのやぐらと類似した遺構の調査結果をもとに、鎌倉のやぐらの独自性について報告を行いました。

やぐらとは？



三方に壇をもつやぐら
(まんだら堂やぐら群)



莫高窟北区(甘肅省敦煌市)瘞窟(いくつ)の例

彭金章・王建軍・敦煌研究院編
『敦煌莫高窟北区石窟』第一巻より

やぐらとは何か

やぐらとは、切り落とした崖面に平面方形(長方形)の横穴を掘り、石塔や石仏を建てて供養する中世の石窟である。

床面や石塔内に穴を穿って納骨するものが多い。規模が大きく、仏殿や座禅窟等として機能したと考えられる窟もある。主として13世紀後半頃から15世紀頃に営まれた(後世まで供養が続く例もある)。

群をなすことが多い。比較的大規模なやぐらや石塔を中心に、その周辺に小型のやぐらが展開するというパターンも多く見受けられる。窟単体ではなく、前面の平場や周辺にあったであろう木造堂等と一体のものとして機能していたと考えられるものもある。

やぐらの構造

前庭部、出入口にあたる羨道(せんどう)、平面方形もしくは長方形の玄室(げんしつ)(主室とも言う。)を持つのが一般的。天井部は平天井が主で、切妻屋根を模した家型(船底型)等もある。床面は平坦で、奥壁・側壁に沿って壇を設ける場合もある。

壁近くあるいは玄室中央の床面に穴をあけ、納骨して石塔や石仏を建てる。壁面に石塔等をレリーフする場合もあるが例は少ない。壁面は基本的に垂直。奥壁や側壁に龕(がん)や長押(ながし)状の掘り込みを作って納骨する場合もある。木製扉等で閉塞した痕跡、内部に柱や梁を設け、木造堂としたと思われるものもある。

浄光明寺 大三輪 龍哉 住職の講話

浄光明寺に残っているやぐらには、大変規模の大きなものもございます。また、現在は墓地となっております東林寺(とうりんじ)跡のやぐらや、裏山をさらに奥へ進んで行ったところにある多宝寺(たほうじ)跡のやぐら群なども含めると、相当数のやぐらがこの浄光明寺の現在の境内に残っているということになります。

さらに、やぐらの構造としましても、扉の痕跡が残っているものや、お地藏様の天蓋の痕跡が残っているもの、あるいはやぐらの中が幾つかの小部屋に分かれているものなど、様々なやぐらがございます。「規模」「数」「バリエーション」のどれをとっても浄光明寺はまさにやぐらの宝庫と言って差し支えないのではないかと思います。

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、私の父である先代の住職大三輪龍彦はやぐらの研究をして著書も出しておりました。今回の比較研究を通して、やぐらの研究がまた一歩前に進んでくれることを期待しております。



中世石窟遺構の分布

上総・安房(千葉県中部・南部)

海上を挟んで鎌倉との交通も盛んであったと考えられ、多くの鎌倉武士の本貫(故郷)となっている地域でもある。そのため、文化圏としては鎌倉と似かよっている。石窟遺構は、富津(ふつつ)市、館山市、南房総市に多い(300から500程度と言われる)。

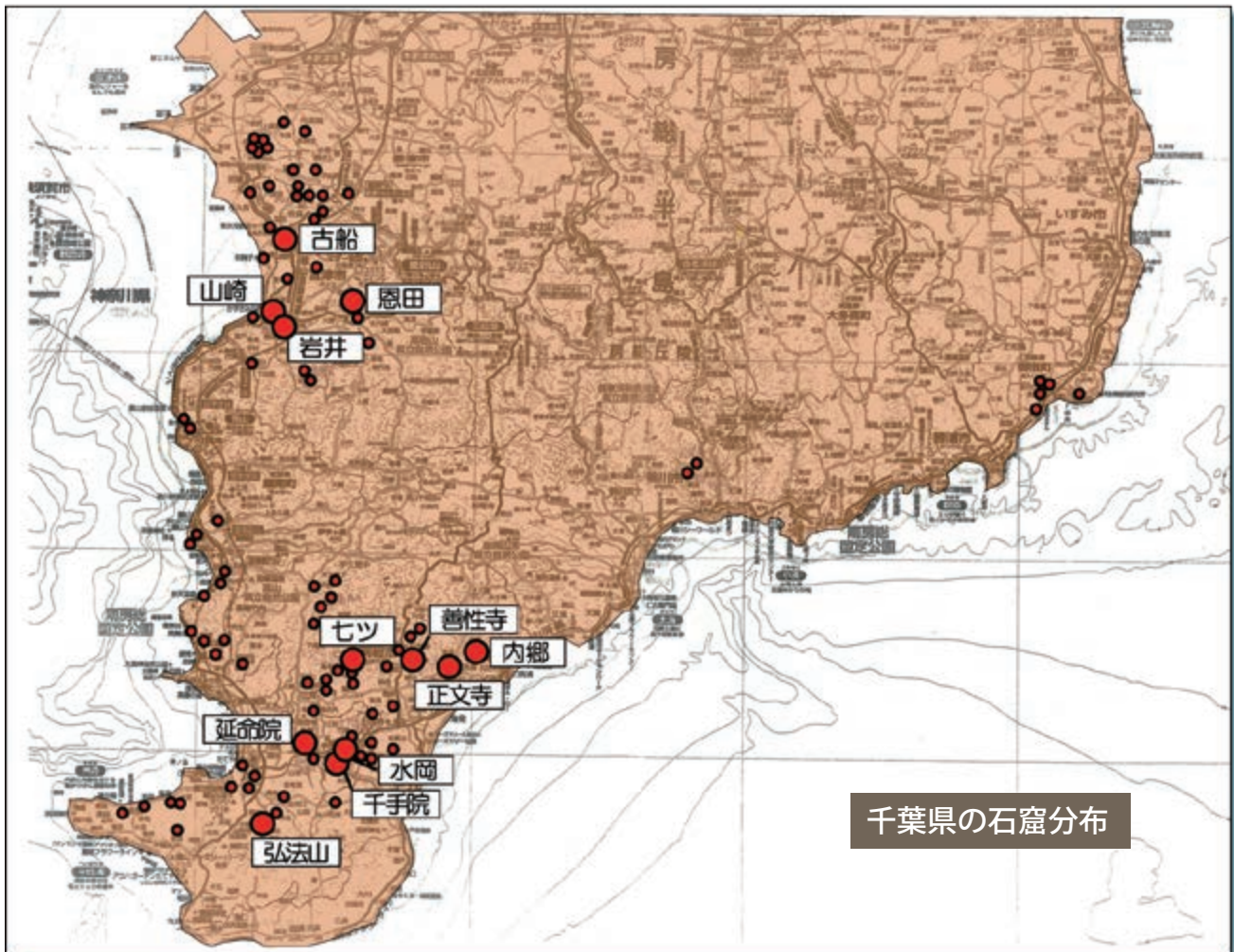
千葉県北部にほとんど見られないのは、地質がやぐらを掘るのに適していないローム質であることも影響していると考えられる。逆に、千葉県南部の地質は三浦半島と同様、凝灰質砂岩やシルト岩が主体である。

千手院(せんじゆいん)やぐら群(館山市)

1号やぐらの内部には中央に千手観音、その左には地蔵の石像がある。浅く彫られた五輪塔レリーフを持つやぐらもある。

また、1号やぐら直上には中世の宝篋印塔(ほうきょういんとう)があり、浄光明寺 綱引地蔵やぐらの上に冷泉為相(れいぜいためすけ)墓があるのと類似性が見られる。

鎌倉のやぐらはレリーフが少ないが、千葉県のやぐらには比較的多い。やぐら群前は墓地になっている。安東(あんどう)氏の支配地域であった。近くには極楽寺の所領があったとも言われ、鎌倉との関連は比較的深い場所である。



正文寺(しょうぶんじ)やぐら群(南房総市)

本堂背後に切岸があり、やぐら状の掘り込みが展開している。やぐらの奥壁と両側壁に肉厚の五輪塔レリーフが彫り込まれ、地輪に四角い小さな龕(がん)があるが、骨が発見されたわけではなく貝殻経(かいがらきょう)が納められていた。鎌倉市の西瓜ヶ谷(にしうりがやつ)やぐら群も同じく肉厚の五輪塔が彫られている。

独立した五輪塔は地元の凝灰岩のほか、伊豆石(小田原・早川・箱根など)が用いられるが、房総半島まで輸送するのが大変だったためか、千葉県はやぐら群はレリーフが用いられるケースが多い。

善性寺(ぜんしょうじ)やぐら群(南房総市)

中世の在地領主、丸(まる)氏の屋敷跡に、供養のた

めに近世になって建てられた寺院(天台宗)。方形で明確な羨道と閉塞施設を有し、五輪塔、宝篋印塔を納める。

恩田やぐら(富津市)

幅は広いが高さがあまりない(1m程度)。石塔を据えるための龕とみることもでき、鎌倉ではあまり見ないタイプだがやぐらの一形態であろう。

七ツやぐら群(南房総市)

七つというのが実際には八つある。峠道の尾根の下を切岸状に切って造成された。入口を四角く縁取っている。鎌倉市のタチンダイやぐら群(北条氏常盤亭跡内)なども同様の形状をしている。



善性寺やぐら群(南房総市)



恩田やぐら(富津市)



七ツやぐら群(南房総市)
山稜部に群在するやぐら



水岡やぐら群(館山市)
古墳時代の横穴墓を利用

水岡やぐら群(館山市)

古墳時代の横穴墓を再利用しているため、天井はドーム型。側壁には薄く彫られた五輪塔レリーフがある。奥壁には龕ではなく横穴墓の棺室が見え、その奥壁にも五輪塔が彫られている。

岩井やぐら群(富津市)

古墳時代の横穴墓を転用。壁には五輪塔の線刻と、その中に納骨のためと思われる丸穴が掘られている。

陸奥(宮城県)

円通院洞窟群(松島町)

間口が5m前後、高さ3m～5m程度の大型のものが並んで展開している。奥壁に小さな龕が幾つもある。近世のものと考えられる。

瑞巖寺(ずいがんじ)洞窟群(松島町)

非常に大規模な洞窟が複数開けられており、その近辺に四角形をした龕のような掘り込みがあり、五輪塔のレリーフが彫られている。概ね近世のものと考えられ、納骨は確認されていない。宝物殿建て替えに伴う発掘調査が行われた際には、埋もれていた石窟(岩屋遺構)が検出された(13世紀後半から14世紀初頭のもの)。しかし、納骨などはなく、明確な用途は不明である。

雄島(松島町)

たくさんの石窟が集中している。基本的には近世のものと考えられるが、中には中世に遡る可能性のある石窟もある。島内にはかつて多数の板碑(いたび)

が建てられていた。碑の前に穴を掘って納骨した例もあり、雄島が中世以来納骨の霊場として機能していたことを窺い知ることができる。

東光寺石窟群(仙台市)

多賀城(中世の陸奥国府)周辺にある寺院。行基が彫ったという伝承のある穴薬師と呼ばれるレリーフをもつ石窟がある。ただし、壁面は垂直ではなく少しカーブしている。板碑を納めた小型の石窟もある。

湊浜(みなとはま)薬師堂(七ヶ浜町)

薬師堂の奥に古墳時代の横穴墓を転用したドーム型の石窟があり、壁面に七体の仏像が彫られている。その間に浅い五輪塔のレリーフを確認できる。石窟仏を供養するために彫られたと思われる。

鎌倉の明月院やぐらもドーム型の窟内に仏像が彫られており、一見類似している。



雄島(松島町)



湊浜薬師堂(七ヶ浜町)

加賀・能登(石川県)、越中(富山県)

滝ヶ原町八幡神社(小松市)

(たきがはらまちはちまんじんじゃ)

2基の石窟は見た目が鎌倉のやぐらによく似ている。石窟内の五輪塔は14世紀後半のものと考えられている。石窟のある丘陵上には鎌倉時代の層塔(そうとう)がある。また、左側の石窟の奥壁には梵字(ぼんじ)が彫り込まれている。鎌倉の百八やぐら群にも同様の梵字の彫り込みが見られる。

地頭町中世墳墓窟(志賀町)

(じとうちょうちゅうせいふんぼくつ)

中世の水陸交通のかなめとして栄えたと考えら

れる港湾の河口付近にある。地上から高さ5mほどの崖面に小型(70~80cm程度)の石窟が7基ほどあり、納骨されている。高い位置の壁面に掘られていること、前面に「框(かまち)」のような棧が取り付けられ、床面が一段低くなっていることなどが、鎌倉のやぐらと相違している。

円通庵遺跡(高岡市)(えんつうあんいせき)

幅が広く天井も現存しないため、石窟状であったかどうか不明。コの字型に区画されていたところに石塔などが安置されている。



滝ヶ原町八幡神社(小松市)



地頭町中世墳墓窟(志賀町)

豊前(福岡県)、豊後(大分県)

如法寺(ねぼうじ)(豊前市)

豊前市近辺は天台修験(てんだいしゅげん)の一大拠点だった。如法寺は、修験の写経寺で、関東から下向した宇都宮氏の配下にあった。境内にある石窟がやぐらに似ている。当地の修験道においては自然の洞窟内で修行をするのが基本であり、人工的な洞窟を用いるとは考えにくいという。ややドーム型に近い

が、奥壁に龕のような掘り込みが見られることや前壁がある点などからすると、比較的やぐらに近い。

夫婦木(めおとぎ)の石窟(豊前市)

修験の理にかなった場所に近年発見された石窟。近辺に寺院などがあるわけではない。奥壁に龕のような掘り込みがある。鎌倉のやぐらに比較的よく似ているが、近世のものである可能性もある。

曲石仏(まがりせきぶつ)(大分市)

南北朝時代に掘られたと思われる四角い石窟。側壁に五輪塔と板碑の浅い彫り込みがある。前壁があった痕跡もしっかり残っており、鎌倉のやぐらとよく似ている。

少林寺の石窟(大分市)

大友氏の家臣の菩提寺。本道裏の崖面にある。床面に四角い掘り込みが見られ、納骨した穴である可能性もある。

普濟寺(ふさいじ)跡やぐら(豊後大野市)

発掘調査はされていないが、九州のやぐらとして論文でも紹介されている。中世のものと考えられる。壁や天井は垂直水平に直線的に切り取られており、内部には、時代が中世後期に下るものの宝篋印塔がある。壁には漆喰が塗られているとのこと。奥壁に龕がある。

辻河原(つじごうら)石風呂、犬飼磨崖仏(豊後大野市)

石塔を納めたやぐら状の龕がある。



曲石仏の石窟(大分市)



少林寺の石窟(大分市)



普濟寺跡やぐら(豊後大野市)

まとめ

- 形態的な異同や時期差もあるが、基本的にやぐらと同様の性格を有すると考えられる遺構が各地に存在することを確認した。寺院との関わりを想定できる遺構や、水陸交通の要衝に立地する遺構が多く、それらの地域と鎌倉の関係が深いものと推測されるが、必ずしも明確ではない。さらに、房総地域を除き、鎌倉のように長期に亘って広範に遺構が造営されることはなく、一時的、局地的もしくは単発的なものにとどまった。
- やぐらは、死者の供養を主目的として中世の鎌倉とその周辺地域に盛行した石窟で、鎌倉との何らかの関係性(法脈等)を足掛かりにこれを採用した地域もあったが、各地に広く拡散(普遍化)することはなかった。あくまで局地的、一時的なものであった。
- つまり、やぐらは、谷戸ー山稜部の自然地形を活かしつつ形成された、鎌倉に独特の宗教空間を構成する稀有な遺構であると言える。



第
5
回

鎌倉の神社について

～鶴岡八幡宮を中心として～

平成28年12月25日実施講座
於 鶴岡八幡宮、横浜国大附属鎌倉中学校

連続講座の最終回は、神社建築についての比較研究の報告です。国内の主な八幡神社や天満宮、東照宮を調査して、鶴岡八幡宮を中心とする鎌倉の神社との相違点や共通点を探り、報告を行いました。

鶴岡八幡宮の概要

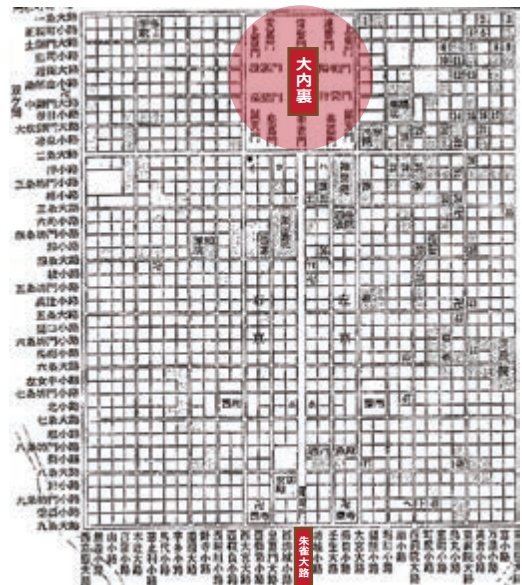
鶴岡八幡宮の立地

- ・現状の立地は、1180年に源頼朝が由比若宮を移設し、1191年に上宮が造営され、現在に至る。
- ・鎌倉平地部の中央北部における南面する丘陵裾に位置する。
- ・平地部全体から見た場合、中心軸の北縁に位置している。平城京や平安京といった都城の中心であ

- る「大内裏」の位置にある（若宮大路は「朱雀大路」の位置に当たる）。
- ・若宮大路は朱雀大路のように正確な南北方向ではないが、平地部のほぼ中央を通り、境内から海岸までほぼ一直線となっている。



鶴岡八幡宮、若宮大路、荏柄天神社、六浦道、元八幡の位置関係



平安京平面図 (出典：『日本史広辞典』(山川出版社))

伽藍配置・境内の状況等

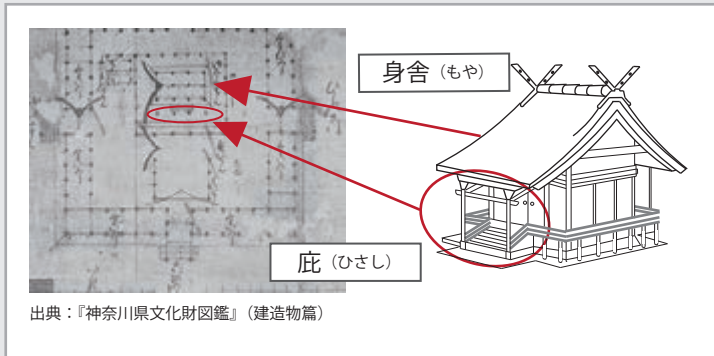
- ・一段高まった見晴らしの良い場所に上宮(本宮)があり、丘陵下の平場に下宮(若宮)ほか舞殿、源平池、白旗神社等がある。
- ・正面南より海岸まで一直線の参道がある(若宮大路約1.8km)。
- ・上宮は、近世城郭を思わせる堅固な高石垣で整備された造成面に設置されている。
- ・石垣の大きさや表面に見られる「矢穴」や「刻印」などの特徴は、江戸幕府による江戸城の寛永年間の大規模整備(「天下普請」)に使用された石垣(伊豆方面より搬入)と共通している。
- ・このため上宮の改修時期(江戸前期寛永元年～三年)に高石垣も同時に設置されたと推定される。



鶴岡八幡宮境内図
鶴岡八幡宮蔵 (出典：鎌倉市教育委員会
『史跡鶴岡八幡宮境内保存管理計画書』)

建築（上宮社殿）

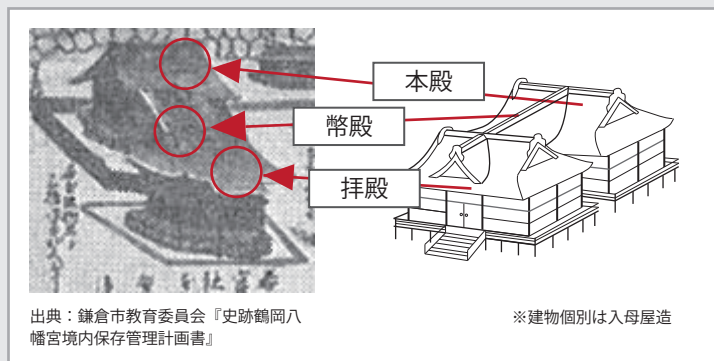
・現行の型式は、九間社流造(きゅうけんしゃながれづくり)の本殿と入母屋造(いりもやづくり)の拝殿(はいでん)を幣殿(へいでん)で連結する権現造(ごんげんづくり)である(文政十一年(1828年))。



流造 (ながれづくり)

切妻屋根の前方が庇(ひさし)状に(流れるように)延びる奈良・平安時代以来の神社本殿特有の伝統的建築形式。

右の図の場合、正面の柱間が3つあるので「三間社流造」という。左の図は、天正十九年指図での三間社流造の上宮本殿。



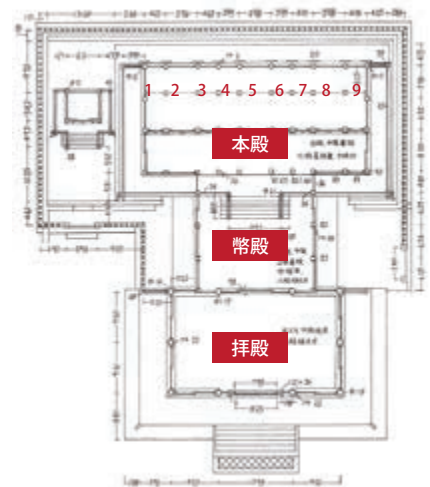
権現造 (ごんげんづくり)

本殿の前方に拝殿を幣殿で連結する複合的な形態。北野天満宮を最古例として、江戸時代以降に盛行した。

右の図の場合、「本殿」「拝殿」の個々はともに「入母屋造」であり、通常は本殿より拝殿の幅が広い「エ」の字状になる。左図は、享保十七年境内図における権現造(複合社殿)の若宮。

上宮の社殿の型式

- 1191年(源頼朝上宮創建当初)：不明
- 1591年(天正十九年指図)：三間社流造
- 1624年(寛永元年)改修：本殿は九間社流造、拝殿は三間社入母屋造の権現造。本殿の横幅が拝殿より広い「逆エ」の字状
- 1828年(文政十一年)修理：型式は踏襲、現行の社殿に至る

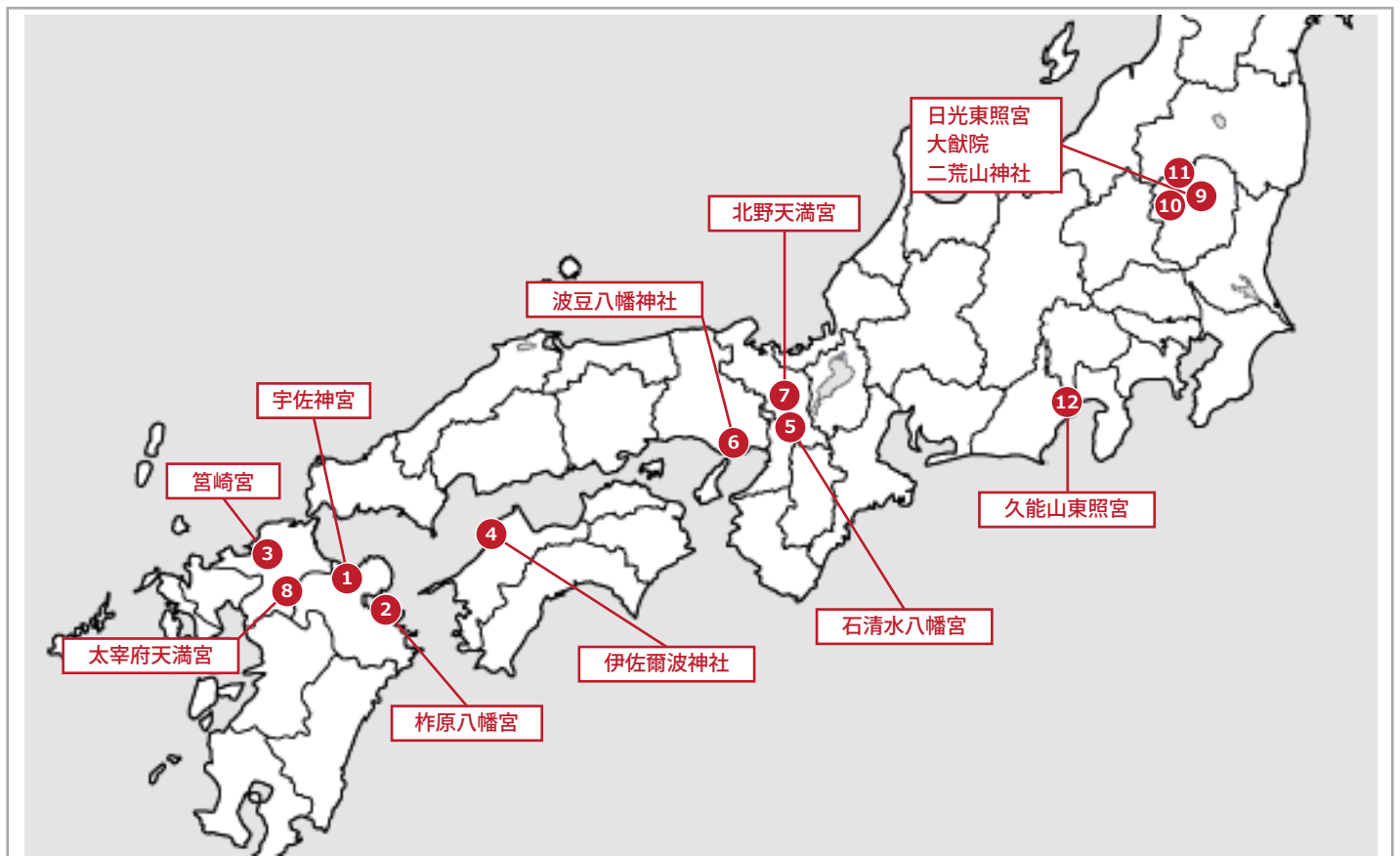


出典：『神奈川県近世社寺建築調査報告書』

神社の調査対象一覧

国内の、主要な又は社殿建築が特徴的な八幡神社と、鶴岡八幡宮を「源氏の廟」とする見方との関連から、菅原道真及び徳川家康の「霊廟」としての性格が濃い「天満宮」及び「東照宮」を調査対象とした。

分類	神社名称	所在地	創建年代	立地	都市部との関係	境内外直線状参道の有無	現存本殿の建築年代	本殿の建築形式	その他特記事項
八幡神社関係	① 宇佐神宮 ウサ ジングウ	大分県宇佐市	725年	山裾、盆地を流れる川に挟まれる	なし	なし	1855～1862年	三間社八幡造 3棟	全国の八幡神社の総本社
	② 杵原八幡宮 ユハラハチマングウ	大分県大分市	836年	山地内の中腹	なし	なし	1850年	五間社八幡造	
	③ 宮崎宮 ハコザキグウ	福岡県福岡市	923年説など	海岸近くの平地（砂丘上）	中世博多に隣接	あり	1546年	九間社流造	博多の八幡宮総社
	④ 伊佐爾波神社 イサ ニワシヤ	愛媛県松山市	不明	山地内の中腹	松山市街地近く（創建場所より移転）	あるが、創建場所より移転	1667年	九間社八幡造	
	⑤ 石清水八幡宮 イシヅミ ハチマングウ	京都府八幡市	860年	独立丘陵の山頂	平安京の南西（裏鬼門）	なし	1634年	十一間社八幡造	平安京の裏鬼門位置、ここより鶴岡八幡宮を勧請
	⑥ 波豆八幡神社 ハ スハチマン ジンジャ	兵庫県宝塚市	973年	集落を見下ろす丘陵上の平地	なし	なし	1403年	三間社流造	三間社流造の現存最古例
廟関係	⑦ 北野天満宮 キタノ テマングウ	京都府京都市	947年	京都盆地内の平地	平安京北西部	なし	1607年	権現造	権現造の最古例（平安時代より続く可能性あり）
	⑧ 太宰府天満宮 ダイアイ フ テマングウ	福岡県太宰府市	919年	丘陵近くの平地	大宰府に隣接	なし	1591年	五間社流造	
	⑨ 日光東照宮 ニツコウ トウショウグウ	栃木県日光市	1617年	山地内の裾	なし（門前町は後に形成）	なし	1636年	権現造（典型）	徳川家康を祀る、この種の複合社殿を「権現造」と呼称することが一般化
	⑩ 大猷院 タイコウイン	栃木県日光市	1653年	同上	同上	なし	1653年	権現造風の廟建築	徳川家光の廟
	⑪ 二荒山神社 フタラサン ジンジャ	栃木県日光市	767年	同上	同上	なし	1619年	権現造（八棟造）	
	⑫ 久能山東照宮 クノウサン トウショウグウ	静岡県静岡市	1617年	海岸近くの山頂	なし	なし	1617年	権現造	徳川家康の最初の廟



比較研究の成果の概要

立地について

鶴岡八幡宮のような、当時の都市の中核に位置し、都市のシンボルとなるような立地の神社は、確認できなかった。

都市から離れた丘陵・山地内に立地：宇佐神宮、柞原八幡宮、波豆八幡神社、日光関係、久能山東照宮

都市郊外の丘陵上に立地：石清水八幡宮、伊佐爾波神社、太宰府天満宮

都市の縁辺に立地：北野天満宮

都市近辺の海岸近くに立地：筥崎宮

立地としては、北野天満宮、筥崎宮に近いが、都市の中核の位置ではない。



立地調査に関する事例：宇佐神宮
丘陵上にあり、社殿は南面するが平地方向には向いておらず、参道も直線状ではない



上宮前面の石垣に見られる矢穴と刻印
(鶴岡八幡宮)

社殿配置・境内の状況等について

本殿

鶴岡八幡宮のように都市部を見下ろせる見晴らしの良い場所に本殿が建てられている神社は、今回の対象神社中にはない。

石垣

近世城郭のような高石垣の上に本殿が設置されている例は、日光・久能山の両東照宮及び大猷院のみ。

切石を用いた高石垣の技法は江戸時代から普及した。石垣は、溶岩が固結した固い安山岩を使用している。江戸城及び鶴岡八幡宮、久能山東照宮は、伊豆箱根周辺の安山岩を使用している。日光東照宮関連は、大型の石垣（正面 1m 角以上、3m 角もあり）を周辺の石丁場より運搬して使用しており、かなり高く石を積んでいる。

鶴岡八幡宮の石垣は、江戸城とほぼ同サイズ（正面 70～90cm 角）である。高さは 2 段で目視 7～8m 程度である。

用語解説

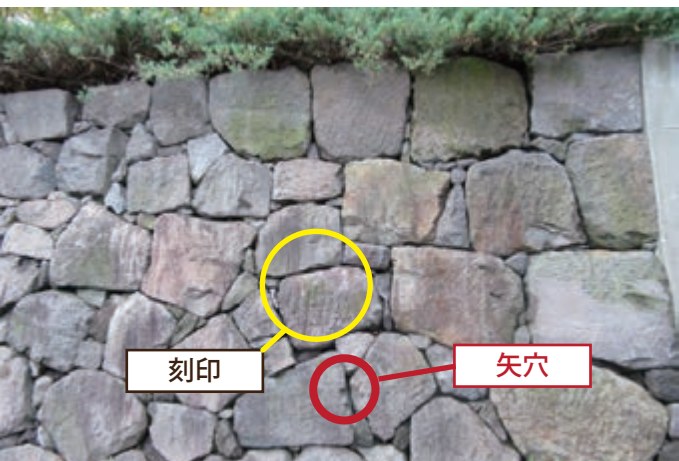
矢穴：石を割る際に、くさびを入れるため、直線状に刻まれた長方形の穴のこと

刻印：切石の製作者（大名など）を示すマークのこと

石丁場：石垣を造るために石を切り出した採石場のこと



矢穴を持つ石垣（鶴岡八幡宮）



江戸城の石垣（文化庁前）には、矢穴や刻印が見られる

矢穴・刻印が共通であることから、江戸城用「天下普請」と同様の石垣を伊豆方面より船で運搬して使用したと推定される。寛永期江戸城用の伊豆産大型石垣を整備に活用した神社は、関東南部では鶴岡八幡宮のみである。

参道

若宮大路のように、ある程度の距離を有する幅広の参道があるのは、今回比較した神社の中では、管崎宮のみである。海岸へ一直線に伸びている点も若宮大路と共通するが、距離は800mと短く、都市の中軸でもない。

若宮大路は、平安京の朱雀大路のように正しく南北方向ではないが、平地の中央を通るように設計されており、源頼朝による計画性が窺われる。本来、頼朝が神に捧げた道であり、管崎宮参道のあり方を参考にすると、設置当初は、都市計画性よりも海岸へ直接通じることの意味がある祭祀性の高い道であった可能性もある。鎌倉の祭祀空間の基軸という評価もできる。

荏柄天神社について

- ・長治元年（1104年）に創建され（創建者不明）、祭神は菅原道真である。
- ・源頼朝が鎌倉の鬼門に位置する神社として保護したという。
- ・鶴岡八幡宮東方、平地から一段上がった丘陵裾に立地し、南方に一直線の参道が「六浦道」まで続く。
- ・現行の本殿は、寛永元年（1624年）、鶴岡八幡宮摂社若宮の社殿を改築した際に旧若宮本殿（1316年）を移築し、近代になって権現造としたものである。



建築関係について

北野天満宮や東照宮に代表される権現造は、本殿・拝殿ともに入母屋造で、拝殿が大きい「エ」の字状であることが特徴。入母屋造は、主に寺院建築の形式であり、実在の人物を祀る廟の性格が濃い「天満宮」や「東照宮」の事実上の寺院的な性格を反映しているものと推測される。

権現造への改修

鶴岡八幡宮の江戸幕府による権現造への改修は、改修時期が重なる東照宮の型式に合わせたと推測される。

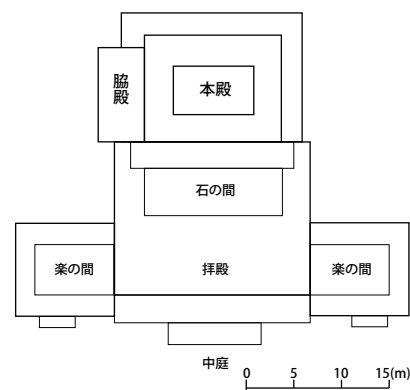
ただし、鶴岡八幡宮は、伝統的な流造を本殿とし、入母屋造の拝殿を前方に付加するというスタイルであり、典型的な権現造の東照宮とは異なり、伝統性を保持した権現造となっている。しかし、「九間社」という、本殿の横幅が広がって「逆エ」の字状となる権現造は、最古例である北野天満宮や様式として確立した東照宮にもなく、類例が見当たらない。

なぜ九間社に改築したのか

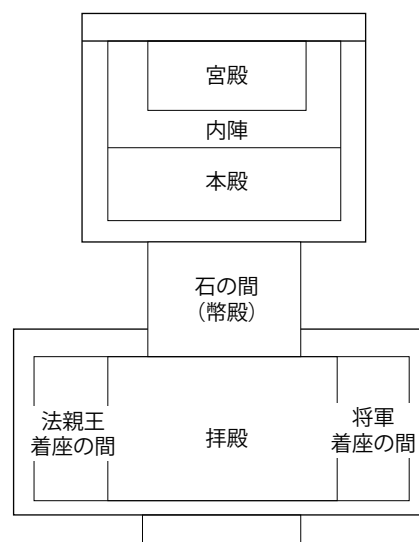
鶴岡八幡宮がわざわざ九間社に改築された理由は、八幡宮の三柱の祭神（応神天皇・神功皇后・比売大神）に合わせて、3つの社殿を並べて建てる宇佐神宮や内部に三神の空間を設ける石清水八幡宮のあり方に戻すという復古的な意味合いもあった可能性もある。

八幡造について

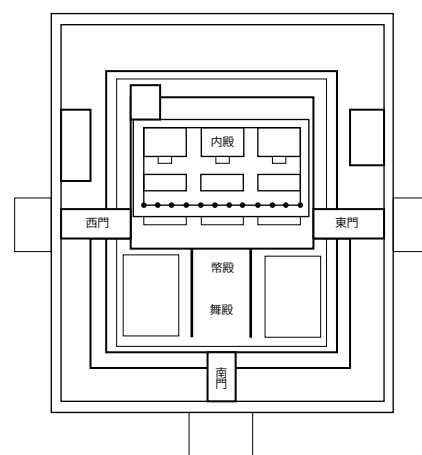
「八幡造」は、切妻の建物を前後に接続して本殿とした様式で、三間社八幡造3棟を別棟横並びとした宇佐神宮、1つの建物内に3つの祭神の空間を空けて別に造る十一間社の石清水八幡宮、間隔がないスタイルの柞原八幡宮、伊佐爾波神社という変遷が窺える。鶴岡八幡宮上宮本殿の場合は、様式は流造だが、内部構造は八幡造の伊佐爾波神社本殿に類似しており、両者が関係する可能性もある。



北野天満宮の権現造社殿。本殿の横幅が拝殿より狭いエの字状社殿



日光東照宮の権現造社殿。本殿の横幅が拝殿より狭いエの字状社殿



石清水八幡宮の八幡造社殿。宇佐神宮の三社殿を接続して横長の十一間社八幡造としている

まとめ



シンボル性

都城における「大内裏」の位置に立地し、都市の中心軸と祭祀性を兼ね備えた参道を持つ鶴岡八幡宮のようなシンボリックな神社は、ほかにはない。

歴代武家政権の崇敬を集め、保護された神社は数多いが、江戸城と同じ扱いの石垣や建築型式も含め、江戸幕府によって極めて大切に修理・整備が行われている鶴岡八幡宮は、江戸幕府にとって別格の存在である日光東照宮に比肩する特別な神社である。

特別性

権現造 + 流造

近世的な権現造に改築されてはいるが、復古的な八幡造の要素も加味した伝統的な流造を保持し、さらに「逆工」の字状のプランを持つ上宮社殿は、ほかに類例を見ない独特の形態である。



報告会

鎌倉の文化財、 その価値と魅力

～比較研究の成果とこれからの課題～

平成29年2月11日実施

於 鎌倉生涯学習センター ホール

5回にわたって行われた比較研究の中間報告である連続講座。その総集編として、比較研究の成果発表と鎌倉の魅力を変えて導き出して新たなコンセプトの可能性を探るため、報告会を開催しました。

鎌倉の普遍的価値、魅力とは何か

報告会の概要

「武家の古都・鎌倉」に替わる新たなコンセプトの構築を目的として、平成26年度から28年度の3年間にわたり、4県市推進委員会では、国内外の類似資産との比較研究を中心に据えて基礎的な調査研究を進めてきました。比較研究の成果については、5回にわたって「連続講座」という形で中間報告をしてきました。

2月11日に行った報告会では、連続講座の総集編

として、比較研究の成果の発表とそれらから導かれる鎌倉の普遍的価値や魅力、さらには新たなコンセプトの可能性を社寺関係者、学識者、行政職員のパネルディスカッションによって議論を深めることができました。

本章では、そのパネルディスカッションの様子をまとめました。

パネリスト

朝比奈恵温氏（浄智寺住職）

大三輪龍哉氏（浄光明寺住職）

田中密敬氏（極楽寺住職）

藤井恵介氏（東京大学大学院教授、「鎌倉」文化遺産比較研究委員会副会長）

河野眞知郎氏（鶴見大学名誉教授、「鎌倉」文化遺産比較研究委員会委員）

谷口肇（神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課世界遺産登録推進グループリーダー）

橋本直樹（逗子市教育委員会教育部社会教育課長）

コーディネーター：榊淵規彰（鎌倉市教育委員会文化財部長兼鎌倉市歴史まちづくり推進担当部長）

榊淵 比較研究の成果報告を踏まえて、鎌倉の価値はいったいどのあたりにあるのか、また、それに根ざす魅力とはどういったものなのか、ご意見をうかがっていきたく思います。まずはじめに朝比奈ご住職、お願いいたします。

鎌倉の社寺は異文化の交流の場でもあった（朝比奈氏）

朝比奈氏 技術が今ほど進んでいなかった時代に、

わずかな情報を頼りに中国にお坊さんが行ったり、あるいは中国からお坊さんを招きたいと手紙を出し、それに応えて日本にお坊さんが来てくれたりといったやり取りがあって、それがまちづくりにつながっていったのだろうと私は想像しています。

日本から中国に行った人たちが色々なものを見て体験して帰国します。彼らは中国でとても良い体験をしたので、ぜひ日本でそれを再現したいと思って広めようとしています。主にお坊さんがそうしたと思いますが、中にはお坊さんについて行った技術者もい

るでしょう。逆に、中国から来た人が日本人に頼まれて、大工さんなどの技術者も造営に関わり、言語の壁を始め色々な障壁を越えていきます。北条時宗公、時頼公も自分の師匠である無学祖元禅師、蘭溪道隆禅師から中国の素晴らしさを聞いていて、ぜひ



鎌倉が中国文化との交流の場であったことを想像するととても楽しいと語る朝比奈氏

中国様式の素晴らしい寺院を造りたいと思い、皆と様々な意見を交わしながら実現していくわけです。

お寺はもちろん信仰する場所ですし、修行する場所ですが、それまで日本になかった大陸からの文化が集まってくる、異文化の交流の場になっていったのだらうと想像すると、ものすごく楽しいですよ。

禅宗のお坊さんは、自分の思いや禅の境地といったものを、言葉で表すよりは庭造りで表そうとするわけです。禅は、インドから中国に渡って日本で広まるわけですが、先ほど鈴木大拙のお話もおあり、だんだん中国のスタイルではなくて日本的になっていった花が開き、鎌倉時代に円覚寺や建長寺があつという間に出来ていきます。色々な時代を経て、その中で中国や色々なところとの交流があつてお寺が出来ていったというわけです。また、やぐらはおそらく、中国に行った人が見てきて、同じよう

なものを日本でも造ってよと言われて造らされたような感じがしてなりません。そういうことをよく想像しています。

こうした色々なことが混ざり合って、榊淵部長が日本遺産の時に「モザイク画」という言い方をしているらしいとおあり、まさにそうした「パズルのピース」がはまって「鎌倉」が出来上がっているというのを思うとすごく楽しいですよ。

榊淵 今回の朝比奈ご住職のお話のポイントを私なりに考えますと、鎌倉が中国との交流の場、中国文化が集まってくる場、そして長く続いた交流によって文化が集積され、今の鎌倉の姿が出来上がってきているのではないかと気がしました。続いて、大三轮ご住職、お願いいたします。

多様な文化がコンパクトに凝縮されていることが最大の魅力（大三轮氏）

大三轮氏 これまでの議論を聞きながら考えますと、山に囲まれたまちの中に社寺を中心に多様な文化が集積されている、というところが鎌倉の最大の魅力ではないかと思えます。

山に囲まれたまちで、閉鎖的な文化が集積されているという点では、京都なども同様なものかもしれませんが、鎌倉はもっと狭い範囲にギュッと凝縮されています。非常にコンパクトな中に、色々な要素が詰まっているというのが最大の魅力です。京都などには残っていない、大仏様ややぐらが鎌倉では見られるということです。

さらに、そういった文化が住宅と混然一体となつて見事に溶け合っているというのも鎌倉の大きな特徴であると思えます。社寺と住宅が溶け合っているというのは、鎌倉時代から連綿と続く一つの文化であろうと考えています。

榊淵 ありがとうございます。最後におっしゃられた社寺と住宅が溶け合っている状態、そしてそれは鎌倉時代から連綿と続いているのではないかとのお話、さらに朝比奈ご住職からご指摘のあった日本遺産のテーマでもある「モザイク画」。まさに鎌倉というまちは、そういった色々な時代の様々な要素



多様な要素がコンパクトに凝縮されていることが鎌倉の魅力と説く大三輪氏

が混ざり合っていることが最大の特徴であり、魅力であると考えています。

そしてそれが狭いエリアにコンパクトにギュッと凝縮されているということ、これは鎌倉の価値を追求していく際には非常に重要であるということをおっしゃったように思います。それでは続きまして、田中ご住職、お願いいたします。

大陸からの文化が集約される、エネルギーに満ち溢れた都市（田中氏）

田中氏 やぐらも中国に同じような例があること、また、大仏様も中国各地にあって、それが奈良や鎌倉に伝わって、鎌倉時代とほぼ変わらない姿で現存していること。こうしたお話を聞いて感じたことは、シルクロードの終着点は奈良であるとよく言われますが、500年ほどの差があるとはいえ、鎌倉時代にまで時代を下ればやぐらや大仏様が残っていたりして、ひょっとしたらシルクロードの終着点は鎌倉なのかもしれない、という点です。

奈良のまちは、聖武天皇の頃は中央アジアの国の人々がまちを歩いていたと言います。鎌倉にも和賀江嶋がありますから、大陸との交流が盛んで、渡来してきたお坊さんも勿論いらっしゃったでしょう。当時の鎌倉は、国際的なまちだったのではないかと

思います。

シルクロードから伝わってきた文化が鎌倉で集約されて、武家の首都とも言えるこのまちで新しいものを創造するということは、きっと当時の人もワクワクしたのではないかと思います。何か新しいことを始めるというのは、ものすごくエネルギーを必要としますが、そのエネルギーは周囲を巻き込んで大きな流れになっていくケースが多いですから、当時の鎌倉はそういう雰囲気だったのではないかと思います。

大三輪ご住職がおっしゃっていた住宅と入り混じった鎌倉というお話には、私も共感しております。「とはずがたり」という書き物があります。「二条」という朝廷に仕えていた女房が最初は宮仕えだったのですが、西行さんに憧れて自分もいつか朝廷を辞めたら紀行をしてみたいと思って鎌倉に来るのですね。

京都で朝廷に長年勤めていた女房ですから、鎌倉のまちに対する評価はどうしても厳しめですが、仮粧坂から鎌倉のまちを見下ろしたら、京都の東山から京のまちを見るのと全く違って袋の中にもものを詰めたように見えると書いています。

すでに鎌倉時代から、混成されたまち並みだったのかもしれませんが、それが伝統として今も残っているのかどうかは別の話ですが、色々な要素が狭い範囲に混ざり合っているというのが鎌倉の良いところであり、そこからまた何か新しい価値が生まれていくでしょう。そしてその中から、まだ研究発表に上がっていないような新しい魅力も出てくるのではないかと思います。

榎淵 ありがとうございます。最後におっしゃっていただいた鎌倉の地形的な特徴である、狭くてコンパクトなエリアに様々な要素が詰まっているという部分こそ大きな魅力であり、さらにこの部分で鎌倉の価値を見極めていく上でどのように要素を絞り込むか、ということが重要だと感じました。

それでは引き続き、学識者の先生方からご意見をうかがいたいと思います。特に今回の比較研究の成果が果たして鎌倉の普遍的価値に結びついていくのか、すなわち新たなコンセプトを構築する材料とし



エネルギーに満ち溢れた中世の鎌倉のまちの様子を想像し、熱心に語る田中氏

て有効に機能するのか、といった観点でご意見をいただければと思います。最初に藤井先生、お願いいたします。

日本独特の遺跡の価値を丁寧に説明することが重要な課題（藤井氏）

藤井氏 今日の比較研究のお話をうかがっていて、東アジア全体の中で鎌倉がどういう位置にあるのかという点は、とても丁寧なお話があったと思います。鎌倉の魅力をどう考えるかということについても社寺の方からお話があり、私も全く同感です。

研究で明らかになった点をこれからどういう風に説明していくかを考えていかなければなりません。一つの重要な点はとにかく鎌倉にはお寺と神社がいっぱい残っているということです。それらは鎌倉時代からずっと維持され、経営され続けています。

遺跡というものには種類が幾つもあって、世界的には日本の遺跡というのは説明しにくい部分があります。例えば、都市遺跡のポンペイだったら、石の建物があって道路がある。それだけで説明できてしまいます。そこに事実があったということで何の問題もないのですね。

ところが、日本の遺跡に限らず木造系の遺跡とい

うのは、建物が焼けてしまったら建て替えるということが繰り返されていきます。そうすると、お寺自体はずっと維持されていても変化し続けていくということになります。石造の文化はずっと止まった状態であるとする、非常にリジット（厳密、厳格であるさま、固定していて動かせないさま）な状態で残るのですが、日本の遺跡はゆるやかに変化していくということになります。例えば法隆寺にしてもどこにしても、京都のお寺は皆そうです。マテリアル（材料・素材）問題と言いますか、こうした性格を有する遺跡をどのように説明していくか、どのように世界にアピールするか、非常に難しいところではありますが、逆に色々な可能性があるのではないかと、とも思っています。

鎌倉は武士の都市ということでスタートしているので、都市として機能しているということは全ての宗教施設、経済施設、交通設備といった色々なものが集中しているわけですね。ところが、それから何百年も経った現代では、その中の一部だけが残っていて、さらにその一部に寺院と神社があるということになると思うのです。この点をどう説明するかということが難しい問題になります。市民の皆様も含め、私たち日本人は鎌倉に「こういうものがある」



木造系遺跡特有の性格について世界にアピールするのは、難しい課題であると同時に様々な可能性も秘めている、と指摘する藤井氏

ということはかなり理解しているわけですが、世界に向けてどういう風にそれを説明できるのか、ということが勝負になるという印象を受けます。

榎淵 ありがとうございます。次のテーマの課題に対してもコメントいただけたかと思います。東アジア世界における位置付けという点において、ご住職方からも言われていた中国との交流、大陸文化の摂取というところと密接に関わってくるであろうと思います。それでは次に、河野先生お願いいたします。

「禅と律」は、鎌倉を世界に説明するキーワードになる (河野氏)

河野氏 確かにこのところ、日本を訪れる外国人観光客が非常に増えていて、鎌倉でも多く見かけるようになりました。彼らが語っていることを聞きますと、例えば大仏様を見て「ビューティフル！」とか「エクセレント！」と言います。禅寺に行けば「生きている遺産ではないか！」と言うぐらい、鎌倉時代の禅の作法は連綿と続いています。

そうすると、藤井先生からもご指摘がありましたように、「説明する」ということが大変重要になってきます。世界、しかもこれは日本人に対して、つまり高校の日本史の授業で「源頼朝が〜」とか「実朝が首を切られた」とかいったことを知っている人たちではなくて、そうしたことを知らない世界の人たちに対して説明していくということになります。しかも、イコモスはそれが「形として現れたものを世界遺産として登録していく」のだと言っているわけです。

世界に対する説明という点で考えると、「禅」は大きな力を持っていると思います。世界遺産となっている京都の文化財には、禅宗寺院も入っています。その中でも特に庭園は、世界に対してとても大きな発信力を持っています。

鎌倉の場合はどうかと言うと、例えば頼朝が最初に造った永福寺(ようふくじ)は広い池をもった庭園がありますが、これは京都の「貴族の文化」を持ちこんだものです。それに対して、鎌倉中期に禅が入ってくると建長寺の裏に中国には例を見ない方丈裏庭園が出来て、これが室町時代各地に広まった禅宗寺



鎌倉の魅力の世界に語る上で、禅と律は非常に重要な要素になってくることを説明する河野氏

院の庭園になっていくわけです。

そこまで考えれば、鎌倉時代以前、鎌倉時代中期、そして室町時代に向けてというように時代の流れ、しかも禅という非常に大きな中国からの流れがあったということが、今も形として残っていることになります。これは大変説明しやすいことだと思います。

世界に対する説明でもう一つ大事なことは、鎌倉の中になぜこれほどたくさんの寺や神社があるのかという点です。この点を考えるに当たって、鶴見大の伊藤正義先生と最近話をしたら、彼曰く「室町幕府という武家政権の中には、禅と律で代表される、「禅律方」という宗教的政策を行う部署があった」とのことでした。

どういうことかと言いますと、宗教界のお寺のトップを選ぶのは、古代までだと天皇が、つまり朝廷が任命しています。それに対して、鎌倉新仏教と言われるような鎌倉のお寺の場合は、そのトップを武家が任命して、宗教界を強力でバックアップしています。しかもそれが鎌倉時代中期には、禅の大きな力によって大きく発展していきました。これは一つの例ですが、こうした説明であれば外国人にも分かってもらえるのではないかという気がしています。鎌倉の魅力外国人に分かってもらえるような説明が非常に重要だろうと思います。

榎淵 ありがとうございます。世界に対しての説明の要素としては「禅」が強いだらうとのお話でした。物理的な要素としては禅宗庭園。今回の報告ではあまり触れませんでした。禅宗庭園の成立は、建長寺の方丈庭園だと我々は考えております。それが瑞泉寺で初期の完成形を生み、瑞泉寺庭園をつくった夢窓疎石が、京都で天龍寺の庭園を造り、最終的には枯山水まで昇華していきます。この始まりが建長寺だと考えております。

さらに、「禅律体制」と呼んでもよい「禅と律」という鎌倉の宗教が、やはり大きな特徴になっています。このあたりをもう少し考えてみたいと思います。田中ご住職は、「禅と律」についてどのようにお考えでしょうか。

律宗の技術集団が、鎌倉都市機能の維持管理の一端を担っていた (田中氏)

田中氏 先ほど、和賀江嶋の話をしました。波にさらわれてだいぶ石が流れ落ちて失われてはいるものの、和賀江嶋は石を積み上げて、舟を仮停泊できるようにした港湾管理局とも言える港です。当然、定期的なメンテナンスが必要になってくるわけです。

また、鎌倉は山に囲まれた地形ですから、土砂崩れなどもあります。豪雨や台風があると道も崩れてふさがります。井戸も埋まります。そんな時、誰が都市のメンテナンスをしていたのかと言うと、実は和賀江嶋は、室町時代まで極楽寺の管理下にありました。ですから、嵐が来て石が流されたら石を積み直したり、道を開いたりといった維持管理を極楽寺が引き受けていたようです。

鎌倉幕府は政治的には大きい存在ですが、鎌倉の都市機能の維持管理の一端を担っていたのは律宗と言われる極楽寺であったり、同じ律宗の多宝寺であったり、経済活動の基盤を整えることに律宗が大きく貢献していたのではないかと思います。

草戸千軒（くさとせんげん：現在の広島県にあった都市）の方にも律宗のお寺が存在していて、海運の重要拠点、律宗のお寺がそれぞれに存在していました。昔、高知県に極楽寺の荘園だったところがあるのですが、時代が室町に下がってきますと、在地の

豪族とのいざこざが出てきます。室町時代の極楽寺目代（もくだい）のお坊さんが、荘園の「あがり」を極楽寺に持ってくるのですが、狼藉を受けて思うようにならない、といった書状が金沢文庫にあったと思います。

また、九州の方まで船を出していたそうです。今は東海道などがありますが、海路も道路もメンテナンスはある程度、室町時代までは律宗のお寺が代行していたというケースが多かったようです。

榎淵 ありがとうございます。律宗の集団、特に土木技術集団、それに含まれる石工といった技術集団が律宗に伴っているというあたりが、鎌倉の都市形成上非常に大きな役割を果たしていると考えられますね。こういったところも含めて、禅と律をさらに深掘りをしていかなければいけないと思いました。

今まで皆様からご意見をうかがってきた中で、非常に大きな要素として、東アジア世界、特に中世東アジア世界において鎌倉はどういう位置付けになるかということや中国との交流や中国文化の摂取といった点でとらえていく、という視点が必要だということを感じました。

具体的な内容としては、鎌倉の地形的な特徴、三方を山に囲まれた狭いエリアに非常にたくさんの要素が詰まっているのはなぜなのかといった事柄を追求していく視点が重要です。さらに禅宗が一つのキーワードになってくる中で「禅と律」、律宗のとらえ方、といった点もしっかり追求していくべきであろうということが見えてきたと思います。

それでは次に、「東アジア世界」をキーワードに、今後コンセプトを再構築していくに当たって特に気をつけなければならない点を課題としてご指摘いただければと思います。藤井先生、いかがですか。

禅宗・律宗の役割をどのように合理的に説明するか (藤井氏)

藤井氏 今日の報告ではあまり出て来ていませんが、確かに「律」というのは事実上鎌倉の中で大変大きな役割を果たしています。具体的に言いますと、中世の国家というのは、政治は武士が握っていたと

しても国家そのものが充足していくための様々な機能を果たしているわけではありません。

それで、各種の自立した団体とか組織、例えばお寺とか神社とかいったところが社会的に色々な機能を持っていて分担しているという、きわめて散在的な状態でした。分権的あるいは民間活力的と言いましょうか、そういう状態で国家が成り立っているのです、お寺が宗教活動とそれ以外の活動を両方担っていて、都市においてはさらに多くの機能を果たすという重層的な役割を持っているわけです。

この点は明らかなのですが、鎌倉において禅宗・律宗がかなり中心的な役割を果たしているということをやうまく説明できるというのですね。ですが、このような話は多分、今日ここにいらっしゃった方たちも、あまり聞いたことがないのではないのでしょうか。お寺というのは宗教施設なわけで、あまりお金稼ぎをしたり、お金稼ぎと表裏一体の社会奉仕活動をしていたり、荘園経営をしたり、といったことはあまりメジャーな話になっていませんよね。

社会経済史などの分野においては、そういうことを専門にしている研究者が何人もいるのですが、なかなか表に出て来ていないという状況です。

榎淵 ありがとうございます。先ほどの先生のコメントにあった、いかに合理的にきちんと説明ができるかということですね。今までも議論の中で、新たな価値に通じるようなことや魅力といったことをお話いただけてきました。

しかし、それらが世界遺産としてのコンセプトを再構築する際に、どのように説明が付くのか、この点が非常に大きな課題として藤井先生から提起されたと思います。それでは最後に、先ほどやぐらの件で大三輪ご住職から課題となるご提言いただきましたが、その他にもこれだけはしっかりしなくてはならない、ということがありましたら、お話しいただけたらと思います。

住民と観光客のニーズの乖離を踏まえたまちづくり (大三輪氏)

大三輪氏 鎌倉は、コンパクトな地域に社寺と住宅

が交じり合っているというお話をさせていただきました。江戸時代以降は、そこに観光地という要素が入ってくると思います。それによって鎌倉の住民が持ち続けていた本来の鎌倉の姿と、観光客が望む鎌倉の姿、二つの鎌倉像というのが出来ていって、近年は観光客の増加に伴ってその二つの鎌倉の距離がどんどん離れてしまっているのではないかという気がしています。

現状はどうなっているかと言うと、まちの景観、名指しはしませんけれども某通りの景観というのは完全に観光客寄りの景観に変わってしまっています。自分が子供の時の通りとは全然違う通りが変わってしまっています。

世界遺産登録の是非についてはとりあえず置いておくとして、これからの鎌倉が取り組むべきこととしては、鎌倉の本来の姿というのをもう一度見直して、さらに今後どうあるべきかについて、行政と市民が意識を共有してまちづくりをした上で、さらに外から来る国内外の観光客に向けて様々な発信ができればよいのかなと思います。

榎淵 ありがとうございます。住民と観光客のニーズの乖離が進む中、鎌倉のまちづくりをどうしていくか。これは世界遺産に限らず、鎌倉が背負う宿命・課題です。それに対して、行政としてもしっかり向き合っていかなければなりません。そうした意味も含めて「モザイク画のまち」というキーワードを打ち出しています。

日本遺産でこのキーワードを主張したのは、「鎌倉は色々なものが混ざってしまって不統一でいけない」というご意見をよく聞くのですが、よくよく考えてみると、それこそが鎌倉の魅力的な姿なのではないのでしょうか。それは、「行政が規制をしないから」ではなく、明治22年以降に近代化が進んでいく中でたどり着いた姿なのです。

この部分に対して「駄目だ」という感覚を持たずに、直すべきところは直し、変えるべきところは変えていきながらも、あるべき姿としての「モザイク画」を大いに評価すべきではないかという考えが根底にあります。この話は少し世界遺産から離れてはいますが、世界遺産というのは、鎌倉のあるべき姿、

ふさわしいまちづくりのツールの一つ、と捉えてお
りますので、まさにご住職からいただいたご意見は
しっかり受け止めていきたいと考えております。

ディスカッションのまとめ (概測)

概測 それでは、独断と偏見ではありますが、まと
めさせていただきたいと思います。世界遺産のコン
セプト再構築に向けて、今日のディスカッションで
得られた大きな材料としては、(1) 東アジア世界
における鎌倉の位置付けを中国文化との交流の中
でどう捉えていくか、という点があります。それは「禅
と律」、「やぐら」、「大仏」といった要素を深掘りし
ていく中で、さらに研究を深めていくことである、

と結論付けられると思います。

さらに、(2) そうした研究によって得られた成
果をいかに分かりやすく、合理的な説明を組み立て
ていくかということ、(3) 歴史的遺産と共生する
にふさわしい鎌倉のまちづくり、これらの点をしっ
かり見据えて取組を進めるということが重要である
と感じました。

ディスカッションのまとめ

コンセプトの再構築に向けて

東アジア世界 における位置付け

中国文化との交流の中で鎌
倉をどう位置付けていくべ
きか、さらに研究を深める

世界に向けた 分かりやすい説明

研究により得られた成果を
分かりやすく、合理的に世
界に向けて説明する

歴史的遺産と 共生するまちづくり

歴史的遺産を多く持つ鎌倉
にふさわしい、まちづくり
を進める

付録（現地調査先一覧）

海外

平成 26 年度

- (1) 中国第 1 回 (27 年 2 月 1 日～9 日)=登封、龍門石窟、白馬寺、雲崗石窟

平成 27 年度

- (1) 中国第 2 回 (27 年 7 月 19 日～25 日)=真如寺、徑山寺、浄慈寺、靈隱寺、上天竺寺、天寧寺、延福寺、国清寺、保国寺、天童寺、阿育王寺、雲巖寺、玄妙観、西湖
- (2) 中国第 3 回 (27 年 8 月 26 日～9 月 3 日)=大足石刻、楽山大仏、麻浩崖墓、敦煌莫高窟
- (3) 韓国第 1 回 (28 年 1 月 12 日～16 日)=鳳巖寺、浮石寺、仏国寺、石窟庵、実相寺、泰安寺、松広寺、宝林寺

平成 28 年度

- (1) 韓国第 2 回 (28 年 6 月 24 日～28 日)=檜巖寺、檜巖寺跡、通度寺、法住寺、麻谷寺、大興寺、仙岩寺
- (2) 中国第 4 回 (平成 28 年 8 月 13 日～20 日)=隆興寺、天台庵、大雲院、五台山 (南禅寺、仏光寺、金閣寺、龍泉寺、南山寺、碧山寺、菩薩頂、顕通寺、塔院寺、殊像寺)、応県木塔、懸空寺、華嚴寺、善化寺

- (3) 東京・甲信・中部第 1 回 (26 年 11 月 3 日)=正福寺

- (4) 東京・甲信・中部第 2 回 (26 年 11 月 12～14 日)=恵林寺、清白寺、東光寺、光前寺、永保寺

- (5) 中国地方 (27 年 3 月 10～12 日)=安国寺、不動院、常栄寺、功山寺

平成 27 年度

- (1) 宮城 (27 年 7 月 30～31 日)=円通院、天麟院、瑞巖寺、雄島、東光寺、菅谷横穴群、湊浜薬師堂 (やぐら)

- (2) 北陸 (27 年 10 月 21～22 日)=滝ヶ原町八幡神社、地頭町中世墳墓窟、円通庵遺跡 (やぐら)

- (3) 日光 (27 年 10 月 29 日)=東照宮、二荒山神社、大猷院

- (4) 千葉第 1 回 (27 年 11 月 10 日)=館山市 (やぐら)

- (5) 千葉第 2 回 (27 年 11 月 16 日)=富津市 (やぐら)

- (6) 千葉第 3 回 (27 年 12 月 22 日)=南房総市 (やぐら)

- (7) 近畿・東海 (27 年 11 月 11～13 日)=石清水八幡宮、北野天満宮、波豆八幡神社、久能山東照宮

- (8) 九州 (27 年 11 月 19～20 日)=豊前市、大分市、豊後大野市、如法寺、夫婦木、曲石仏、普濟寺跡等 (やぐら)

- (9) 四国・九州 (27 年 11 月 24～27 日)=伊佐爾波神社、柞原八幡宮、宇佐神宮、宮崎宮、太宰府天満宮

平成 28 年度

- (1) 福井・富山 (28 年 8 月 22 日～23 日)=永平寺、瑞龍寺

国内

平成 26 年度

- (1) 京都第 1 回 (26 年 10 月 23～25 日)=龍安寺、妙心寺、知恩院、天龍寺

- (2) 京都第 2 回 (27 年 1 月 26～28 日)=大徳寺、相国寺、南禅寺、建仁寺、東福寺、泉涌寺

白馬寺（中国河北省洛陽市）

鎌倉の文化財

その価値と魅力～比較研究から見たもの～

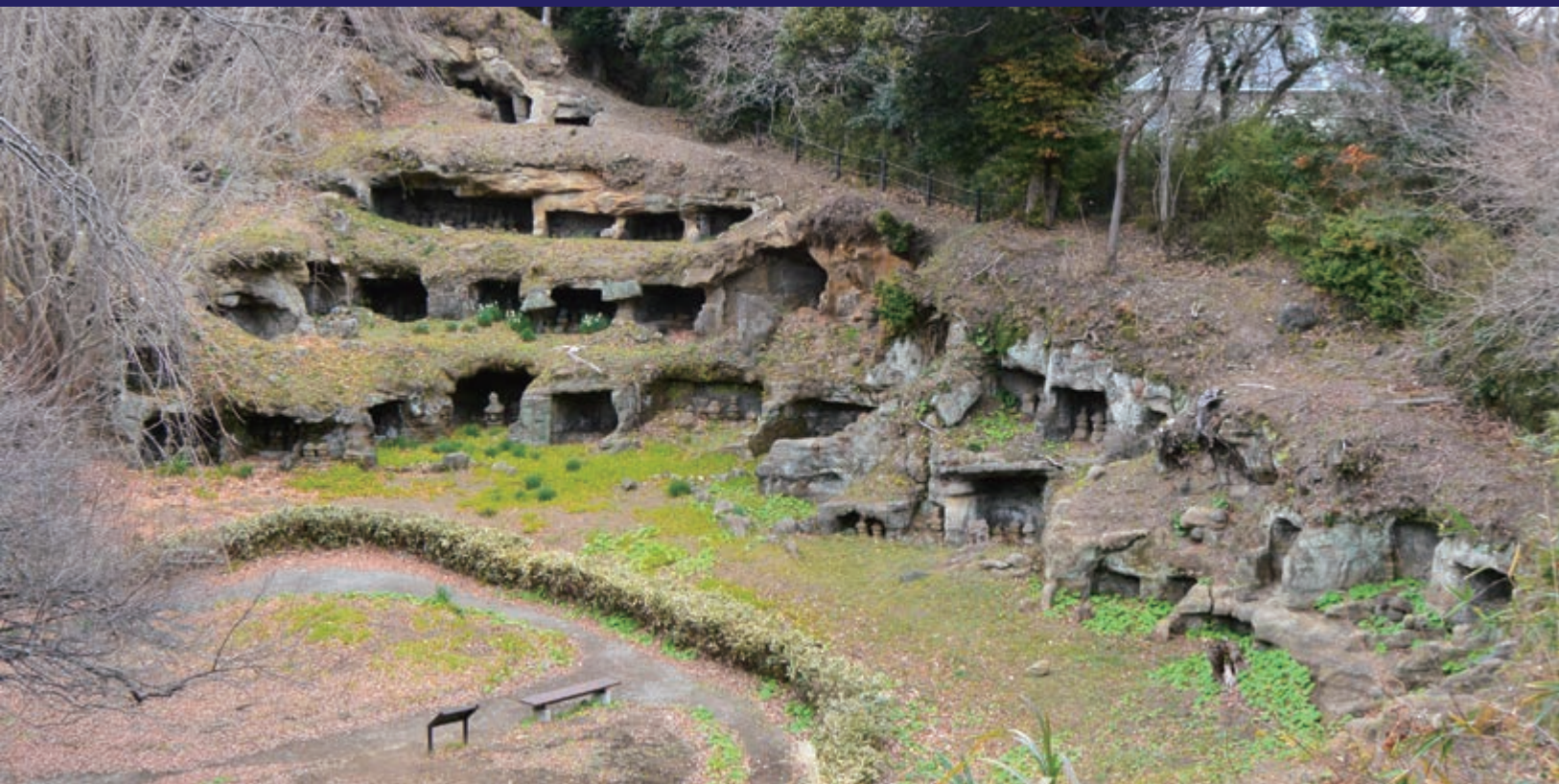
発行者：神奈川県・横浜市・鎌倉市・
逗子市世界遺産登録推進委員会

事務局：〒248-8686
鎌倉市御成町 18-10
鎌倉市歴史まちづくり推進担当

電話：0467-61-3849

発行：2018 年 (第 2 版)

※写真・本文等の無断転載は固くお断りします



まんだら堂やぐら群